NEWSLETTER
S O S H O T S U J I N
vol.4

雙松通訊

二松學舍大學

21世紀COEプログラム
「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

平成17年度前期活動報告

研究者ネットワークの構築に向けて

国際会議等に参加して

データベースの構築に向けて

研究レポート

目次

平成17年度前期活動報告

1 平成17年度前期活動報告　統括
拠点リーダー　高山 節也
2 上古・中古日本漢文班
3 中世日本漢文班
4 近世・近代日本漢文班
5 朝鮮漢学班
6 日本漢字音・辞書・字書班
7 日中文化交流班
8 書誌学・目録データ班

研究者ネットワークの構築に向けて

9 '05国際シンポジウム
「世界における日本漢文学研究の現状と課題」を開催して
拠点リーダー　高山 節也
10 平成17年度COE海外拠点リーダー会議を開催して
調整担当者　白藤 禮幸

国際会議等に参加して

11 第4回中文文献資源共建共享合作会議
事業推進担当者　町 泉寿郎
12 北京大学主催・国際学術会議「北京論壇2005」
COE顧問　戸川 芳郎・事業推進担当者　町 泉寿郎
13 第16回EAJRS（欧州日本文献専門家協会）年次総会
事業推進担当者　町 泉寿郎
14 法鼓山中華仏学研究所を訪ねて
COE研究員　會谷 佳光

データベースの構築に向けて

15 「日本漢文学書誌データベース」検索システムの構築
COE研究協力者　上地 宏一

研究レポート

16 漢文・訓読と字体と典籍と
COE客員研究員　石塚 晴通
17 長沢博士『和刻本漢籍分類目録』以後
COE客員研究員　中野 三敏
18 中国における日本漢学の研究　その一　叢書
COE海外拠点リーダー　王 宝平

19
20 寄贈資料一覧

21 活動・会議一覧
22 ●シンポジウム等開催　●現地調査
●国際会議出席等　●諸会議
23 ●公開講座

24 和刻本古文真宝書影集4
編集後記

平成17年度前期活動報告　統括

拠点リーダー　高山 節也

平成17年度前期活動報告

平成16年後期から実質的に活動に入った本プログラムは、二年目に入り、いよいよ中間評価の「進捗状況報告書」をまとめるべき時期にさしかかった。実際の報告書の提出は18年1月であるが、先ずは簡略な現状報告を行っておきたい。

昨年度から本プログラムは、4本の柱を中心に据え、それと同時に8の班が多少の振幅を持ちつつそれと係わりながら、独自の活動を展開するという方法で、事業を推進してきた。以下箇条書き的に活動をまとめてみたい。もっとも本文は全体の総括であるため、より詳細な情報については各班その他本号掲載の関連部分を参照されたい。

1　データベースの構築

日本漢文関連文献の所在情報を世界的規模で網羅するデータベースについては、本プログラムの研究活動や人的交流に役立つ情報資源の蓄積や、研究者や組織への情報開示をうけもつ、いわば本プログラムの土台をなす活動である。現在おおよそその機構の構築は終了して、実際のデータ約4万件の入力とその公開の方法の検討とが行われている。それらの詳細については、本号掲載の上地宏一氏の報告を参照されたい。他機関との関係についても、京都大学人文研の全国漢籍データベースとの同時検索のシステムを確立し、さらに国立情報学研究所とのリンクも計画中である。現状はあくまで試行段階であるが、本COEホームページからデータベースの検索が参照できる。

2　海外との連携と研究者ネットワークの確立

この分野は特に本年度稔りの多かった部分であろう。第一に17年9月開催の国際シンポジウム「世界における日本漢文学の現状と課題」が挙げられる。国外からの招聘者約10名を中心に公開講演を含めて活発な論議が行われた。これは前年度に行われた、中国・台湾・ヨーロッパ等の講師による公開講演会あるいはテーブルスピーチによって、得られた人的情報に基づいて開催したもので、その実績がその後のスウェーデン・ルンドにおけるEAJRS（欧州日本文献専門家協会）への参加や、中国南京における中文文献資源共建共享合作会議への参加、あるいは台湾台北における法鼓中華佛學研究所の訪問といった形で、実をむすびつつあるのである（本号報告参照）。ちなみに18年度シンポジウムは中国浙江工商大学において開催の運びとなっており、これも海外研究者とのネットワーク構築や世界的レベルにおける研究活動の成果として記録されるべきトピックスである。

3 若手研究者や文献専門技能者の養成

本プログラム開始以前の段階で、書誌技能者養成講座として開催されていたものを継承する形で17年度から本格的にスタートした各種講座や公開講演、大学院との連携講座などがあるが、プログラム発足以前のものより遙かに多彩かつ奥の深いものとなっている。特に大学院講座と連携して、受講生に単位取得を認める組織的な改革は特筆すべきもので、18年度はそうした講座をさらに増加させる予定である。なお研究者養成としてはCOE研究員やCOE助手の採用を行っているが、18年度はこれらの若手への論文発表への支援や研究会・読書会の開催などを通して、学位取得などの成果を上げうるような企画を考慮中である。

4 漢文教育の新たな展開

現時点ですでに漢詩文の新しいテキスト二種、つまり日本漢詩文や朝鮮漢詩文などをも重点的に視野にいれ、画像や英訳など新機軸を打ち出したものを編修し終えているが、さらにその過程で特に江戸期日本漢文中心のテキストや、漢文訓読を重点においた訓読語法テキストの開発など、新たな視点がさらに追加されている状況である。

なお各班の活動や客員研究員・研究協力者の活動など報告すべきことも多々あるが、本号に掲載されている記事によって概略は理解していただけるものと思う。最後に重要なトピックスとして、『日本漢文学研究』創刊号が印刷にまわる段階にはいっていることを報告しておきたい。高度な水準を保つために、投稿原稿には査読者を配した、国際的な日本漢文学の学術専門誌である。17年度最後を飾る成果となろう。

上古・中古日本漢文班

主　任：白藤 禮幸
担当者：山崎 正伸　吉原 浩人　谷本 玲大
協力者：河野 貴美子

平成17年度前期活動報告

この班の担当する範囲は、文字を持たなかった日本が中国から伝えられた漢字によって文字というものの存在を知りみずからも漢字漢文で文章表現を始める草創期から、平安時代の空海・菅原道真・三善清行・大江維時・源順・藤原雅材・源為憲・大江匡衡・慶滋保胤・藤原明衡・大江匡房などの文人・学者が輩出した、漢文学の完成期までを含む。

古代に中国・朝鮮半島から渡来して来た人たちによって漢文体でなされた書記活動も推古朝の伝聖徳太子の三経義疏となると日本人による漢文表現が生まれてきたということになる。日本語を漢字によって書き表わすことが行われるようになったのは天武朝からとする説もあるが、その中で『古事記』『万葉集』も作られた。また、『大宝律令』など、政治の世界は漢文で書かれたものが普通であった。6世紀に伝わったとされる仏教は漢訳仏典を理解することが始まりであった。しかも単に将来されてきた仏典を読解・訓読するばかりでなく、先の聖徳太子の疏を始めとして、智光・明一・善珠・常騰などによって仏典注釈書も作られている。『学令』によれば、「凡経周易尚書周礼儀礼礼記毛詩春秋左氏伝各為一経、孝経論語学者兼習之」「凡教授正業周易鄭玄王弼注、尚書孔安国鄭玄注、三礼毛詩鄭玄注、左伝服虔杜預注、孝経孔安国鄭玄注、論語鄭玄注何晏注」「凡学生先読経文通熟然後講義」「凡算経孫子五曹九章海嶋六章綴術三開重差周髀九司各為一経、学生分経習業」などと学ぶべき典籍、拠るべきテキストが列挙されている。学問の世界とは漢籍の読解がその内容であった。

このように、漢字が唯一の文字であったこの時期については、一字一字の漢字を上代人がどのように理解し、漢文の文構造をどのように捉えたか、という漢字漢文の受容からはじまって、その用語・用字に漢籍・仏典の影響を受けたか、更に、どのような漢字漢文文献を残したか、という調査研究もその課題として考えられる。白藤は、'上代漢字文研究'というテーマを主唱して30年余りとなる。協力者河野貴美子は、上代の邦人撰になる疏について奈良・京都の寺院の経蔵に古写本を求め、大正新脩大蔵経など活字本の誤りを指摘し、また、そこに引かれた漢籍や字典の調査によって、伝えられた漢籍の系統を明らかにしており、その研究を続行している。白藤は上代の文献についての用字法・用語法・文体、古辞書研究の傍ら、本プログラムの計画としては日本漢文資料の網羅的なリストの完成を目指し、現時点では1500タイトルをカード化した。今後は日本古典全集・古典文庫や、大東急記念文庫・陽明文庫・時雨亭叢書・岩崎文庫・神宮文庫などの複製シリーズの調査を計画している。また、訓点語研究との繋がりから漢文訓読文献資料一覧の作成を進めている。

古代にあっては、文学とは漢詩・漢文学であった。奈良時代に編まれた『懐風藻』から、平安初期の『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の三大勅撰詩集まで、9世紀までは漢詩文のみが貴ばれていた。これは、遣隋使・遣唐使で大陸へ渡った人たちが、中国の人と意を通わせるものは、やまと歌ではなく、漢詩漢文であったからであろう。『日本書紀』や六国史の編纂も多分に外を意識してのものであったろう。平安時代、仮名がうまれ、10世紀初、平仮名で書かれた『古今和歌集』が勅撰集として作られ、以後勅撰和歌集は中世まで出されるが、仮名の散文はその文字が「女手」と称されるように、晴れのものではなかった。政治の世界では『弘仁格』『延喜式』など依然として漢文の世界であった。そのような文学環境にあって菅原道真撰という説のある『新撰万葉集』は漢詩と和歌を組合せたもので、新しい文学の形を生み出したものである。和歌を専門とする山崎正伸がこれを取り上げるのは、本書が立つ、そのような文学史的意義を広く日本漢文学の中で考察するためである。これにつづくものとしては『和漢朗詠集』があり、更に多数の漢和連句が編まれている。谷本玲大には、既に本書を研究した共著があるが、去年に続き、本年は京大本・大阪市大本・群書類従版本を調査する。

後世から見れば、女流による仮名文学が盛んに行われたようであるが、当時の社会の意識ではやはり、漢字漢文が表に立つ文化であった。男性貴族は日記を漢文体（いくぶんかの和臭を含むが）で書いた。その多数のものが今日に伝えられている。彼らの宮廷生活を過ごすのに必要な知識を集めた有職書も主として漢文であった。政治の公的文章は漢文体で書かれ、『平安遺文』などに収められている。仏教においても、密教の儀式に、儀軌・次第・作法・願文・講式など、新しい漢文体の文章がでてくる。吉原浩人は天台宗僧永観の『往生講式』『三時念仏観門式』についての校訂本文の作成・註釈を行い、報告書の刊行を準備している。

中世日本漢文班

主　任：磯 水絵
担当者：田中 幸江
協力者：福島 和夫　楊 桂香　新井 弘順　ニールス グュルベルク　小川 剛生　高橋 秀城

平成17年度前期活動報告

この度、中世部会事業推進資料として「雅楽資料集」及び「声明資料集」の2冊の公刊を予定している。現在、制作中であるが、概要を以下に記し、活動報告としたい。

第1冊「雅楽資料集」内容細目（予定）

《論考篇》

『教訓抄』所引漢籍について　磯水絵
藤原宗輔年譜考　小川剛生
明清楽の楽譜（仮）　楊桂香
九条兼実の音楽　付『玉葉』音楽年表　櫻井利佳
東儀鉄笛著『楽道偉人伝』について　付翻刻　滝沢友子編
東儀鉄笛著『楽道偉人伝』翻刻　滝沢友子・下浅千穂・芝田泰典編
東儀鉄笛著『楽道偉人伝』人名索引　滝沢友子編
『胡琴教録』真名本の研究　付翻刻・校異　神田邦彦

《資料篇》

上野学園大学日本音楽史研究所蔵書目録
　1.雅楽関係史料目録　神田邦彦編
　　貴重本・和装本目録
　　別置文庫「楽歳堂旧蔵楽書類」
　　別置文庫「円満院門跡旧蔵楽書類」
　　別置文庫「山田孝雄収集『體源鈔』」
　　別置文庫「窪家旧蔵楽書類」
　　別置文庫「稲葉与八旧蔵楽書類」
　　書名索引
　2.明清楽関係史料目録　滝沢友子編
　　別置文庫「波多野太郎収集明清楽史料」
　　書名索引
『教訓抄』編年年表　磯水絵・田中幸江・川野辺綾子・神田邦彦編
古記録音楽年表
　『山槐記』音楽記事年表　磯水絵
　『台記』音楽記事年表　廣瀬千晃
　『長秋記』音楽記事年表　田代幸子
　『水左記』音楽記事年表　芝田泰典
正・続群書類従〈管絃部〉索引
　《事項編》（稿）　櫻井利佳編
　《人名編》補訂版　磯ゼミ編／神田邦彦補訂
日本古典全集本『続教訓抄』人名索引（稿）　神田邦彦・川野辺綾子編

第2冊「声明資料集」内容細目（予定）

《論考篇》

上野学園大学日本音楽史研究所蔵声明史料について　新井弘順
講式とは何か　ニールス・グュルベルク
『二尊講略式』について（仮）　高橋秀城

《資料篇》

伽陀集翻刻
　魚山叢書『伽陀集』　田中幸江
　金沢文庫蔵『諸経要文伽陀集』　福島和夫・田中幸江
　金沢文庫蔵『聖宣本伽陀集』　福島和夫・田中幸江
　金沢文庫蔵『舎利講伽陀集』　福島和夫
　金沢文庫蔵「舎利講伽陀　第二日」（断簡）　福島和夫
講式翻刻・注釈
　『大黒講式』注釈　ニールス・グュルベルク
　『二尊講略式』翻刻・注釈　高橋秀城
関係史料翻刻・解題
『連々令稽古双紙以下之事』　高橋秀城
金田一春彦収集声明史料について　福島和夫
『四座講式の研究』と金田一春彦博士により
　収集された講式資料　ニールス・グュルベルク
上野学園大学日本音楽史研究所架蔵講式史料目録
　講式分類表　田中幸江
　講式史料目録　田中幸江編　佐藤等・井黒佳穂子
　講式史料目録人名・地名索引　田中幸江
　講式一覧（講式各段式文初句並びに伽陀一覧表）
　　高橋秀城・田中幸江
上野学園大学日本音楽史研究所架蔵講式伽陀索引　田中幸江
伽陀集所収伽陀索引　田中幸江

【付記】

なお、第1冊「雅楽資料集」《資料篇》上野学園大学日本音楽史研究所蔵書目録、1.雅楽関係史料目録の書誌調査には、森洋子、阿部久実子、岸川佳恵、福田英世の各氏に、2.明清楽関係史料目録には、櫻井利佳（東洋大学大学院）、廣瀬千晃（国立歴史民俗博物館外来研究員）、田代幸子（学習院大学大学院）の各氏にご協力いただいている。正・続群書類従〈管絃部〉索引《事項編》（稿）では、入力作業を塩島翔、野元偉出（法政大学大学院）の両氏にお願いしている。論考篇・資料篇執筆の滝沢友子、神田邦彦は上野学園日本音楽資料室研究員、川野辺綾子は筑波大学大学院の所属である。

第2冊「声明資料集」講式資料目録の書誌調査は、佐藤等（駒澤大学大学院修了）、井黒佳穂子（専修大学大学院）の両氏にご協力いただいている。

近世・近代日本漢文班

主　任：町 泉寿郎
担当者：横須賀 司久　大島 晃　揖斐 高　山辺 進
協力者：ロバートキャンベル　長尾 直茂

平成17年度前期活動報告

16・17年度の調査研究によって、論文・資料集などいくつかの具体的な成果をあげつつあり、関連資料の調査も進捗している。現状の問題点を整理しつつ、次の活動計画を構想中である。

課題1「和刻漢籍の祖本研究」「漢籍の考訂・校勘の研究」「江戸前期の漢籍註釈の研究」（事例研究として『性理字義』『老子鬳斎口義』『三国志演義』を中心に）

大島晃担当者・長尾直茂協力者を中心に研究を進めており、以下の研究成果があった（2005年12月末日現在、以下同じ）。大島晃は「朝鮮版晋州嘉靖刊本系統『北渓先生性理字義』五種対校略考」（『漢文学　解釈与研究』8）を発表した。長尾直茂は朝鮮本『三国志演義』を韓国において現地調査した。『老子鬳斎口義』については、研究会を開催して①ー『老子翼』の受容との重なり方の検証、②ー『列子鬳斎口義』『荘子鬳斎口義』との関係の検討、を考究した。

課題2「日本近代における漢学・漢文学」

1）江戸と明治の接点

町泉寿郎担当者・清水信子研究員を中心に、清学の影響下に成立した考証学の学統について調査研究を進めており、以下の研究成果があった。町泉寿郎は「医学館の軌跡-考証医学の拠点形成をめぐって」（『杏雨』7）を発表した。清水信子は「伊藤忠岱書写日本漢文関連資料目録」を作成した（紀要『日本漢文学研究』掲載予定）。大田錦城に関する第一次調査を終了し、海保漁村・島田重礼に関する資料調査に着手した。また金沢地方を調査して、島田重礼・根本通明・重野安繹・那珂通世・北方心泉等に関する資料収集に成果があった。

2）明治後半より大正・昭和初期

山辺進担当者によって随鴎吟社の活動を採りあげて調査研究を進めている。東大明治新聞雑誌文庫・早稲田大学図書館の所蔵資料を調査収集し、明治37～昭和19までを3期区分し、その第1期について「随鴎吟社の創立に就いてー明治後期に於ける漢詩結社の活動ー」を作成した（『東アジア学術総合研究所集刊』36掲載予定）。なお継続して明治末期・大正・昭和初期の随鴎吟社の活動および同吟社の漢詩人に就いて調査研究報告していく予定である。

課題3「江戸・明治期漢文資料の目録作成」

適時、揖斐高担当者・ロバートキャンベル協力者と意見交換しつつ、町泉寿郎担当者・新井洋子（本学非常勤助手）・岡野康幸研究助手を中心に目録編集作業を進め、『江戸漢学書目』（約9000部）『江戸明治漢詩文書目』（約12000部）を作成した。江戸期における漢学の蓄積の厖大さと、旧来の漢学が明治期に急速に凋落するのに比して、漢詩文の創作が江戸～明治を通じて持続するさまが、ここに顕著に看取される。今後は実地調査に着手し、調査結果を反映した精細な基礎資料を作成していきたい。また『漢学』については上記書目作成をふまえ、北京大学主催の北京フォーラム（2005.11.17）に参加して、同大学で編纂中の叢書『儒蔵』に参画し、韓国・ベトナムとともに海外典籍の部分を担当する計画が具体化している。

課題4「日本漢文学史テキスト作成-倉石武四郎講義ノートの整理刊行」

大島晃・町泉寿郎・佐藤進（日本漢字音・辞書・字書班）の各担当者、長尾直茂・河野貴美子（上古中古）両協力者、戸川芳郎顧問による定期的な検討会を重ね、今年度末の刊行を予定している。

課題5「漢方医書研究」

町泉寿郎担当者が小曽戸洋協力者の協力を得て、北里研究所・東洋医学総合研究所での実地調査を行った。大塚修琴堂文庫（漢方中心）の文体別分類の結果を欧州日本文献専門家協会において報告し（2005.09.23、スウェーデン・ルンド大学）、新出の合田文庫（蘭方中心）について、「医家合田の歴史と蔵書」（『日本医史学雑誌』51-3）を発表した。電子テキスト化をすすめている『日本医譜』についても、今年度中に本プログラムのHP上で部分公開する計画である。

課題6「日本漢学者伝記情報に関するデータベースの作成」

揖斐高担当者、ロバートキャンベル・上地宏一両協力者と随時、意見交換しつつ、情報収集に努めている。構築中のデータベースの検索システムを作成するうえで、一定の成果があった。

課題7「三島中洲研究」

月例の「三島中洲研究会」を前年に引き続き開催した。参加者は、大学院生から元大学教員まで、日中近代史・中国思想史・日本教育史など、年齢も専門分野も多様である。7月には、外部講師を招いて講演会を実施した（狭間直樹氏「善隣訳書館と岡本韋庵」）。9月には日中文化交流班との共催によるシンポジウムを実施した。さきに例会報告の要旨をまとめた『会報』2号を発行し、今年度中に『会報』3号を発行する予定である。

朝鮮漢学班

主　任：小川 晴久
担当者：渡辺 了好
協力者：芹川 哲世

平成17年度前期活動報告

雙松通訊第3号に紹介された活動計画のうち、2005年12月末までに行なったものをご報告する。

一、『韓国漢文学研究』のバックナンバーの収集

11月初旬訪韓し、出版元太学社に在庫のあった第17号から現在までの第35号までを購入する。創刊号から第16号までは幸い東京大学教養学部国文学漢文学図書室所蔵のものをコピーして、仮製本の上、全冊揃える。11月初旬の訪韓で、韓国漢文学研究会の機関誌の本誌だけでなく、いくつかの大学で漢文学研究の研究誌が出ていることを知った（芹川哲也氏ご教示）。韓国で漢文学研究が活発になってきている証しである。

二、朝鮮総督府時代の漢文教科書（コピー）の収集

11月初旬の訪韓で二ヶ所においてこの収集に当った。大田市のハンバッ（大きい田の意）教育博物館では、『普通学校学徒用漢文読本』（巻三、明治44年刊）、『普通学校朝鮮語及漢文読本』（巻一、大正4年刊）、『中等教育漢文読本』（巻二、昭和5年刊）、が朝鮮総督府編纂教科書としてコピーできた。また日本統治以前の1896年刊の『国民小学読本』（学部編輯局新刊）をコピーできたのは望外の幸せであった。朝鮮王朝が大韓帝国と衣更えした年に出た朝鮮独自の教科書であり、ハングルと漢字併用の小学読本である。ソウルの国立図書館では『高等朝鮮語及漢文読本』（巻一、大正2年刊、大正10年増刷本）、同（巻二、大正2年刊、大正11年増刷本）、同（巻五、大正11年刊）、『新編高等朝鮮語及漢文読本』（巻一～巻五、5冊、大正13年刊）計8冊をコピーした。大田のハンバッ教育博物館では研究用であることを条件に無料でコピーを提供して下さった。学芸員の金ソンヒョク氏に多大のお世話になった。ソウルの国立図書館ではコピーは有料であったが、とてもオープンな取扱いで、感銘を受けたことを付記したい。日本国内の東京の東書文庫蔵の14冊を加えても、総督府が刊行した漢文教科書で収集できたものはまだ一部であるから、その収集作業はなお継続しなければならないが、今まで収集できたものの範囲でも、大よその分析はできる。平行して進めたい。

三、阿部吉雄氏調査の李退渓著作の江戸時代和刻本

11種46巻45冊（合冊して30冊）であることは『日本刻版李退渓全集』の解題で明らかにされていたが、2005年8月2日の足利学校訪問で、1種を除いて原本に接することができた。その1種は「七先生遺像賛」（一巻、1冊）で内閣文庫所蔵本である。他の11種は全部阿部先生収集であり、中身は前記日本刻版全集に影印されているが、収集された原本は史跡足利文庫に平成8年9月に寄贈され、今回原物を直接確認することができた。阿部先生収集の自省録への阿部先生の書入れは影印では判読不能であり、原本に当った結果、山崎闇斎学派が主に自省録の影響を受けていることは、通訊第3号に述べたが、「李退渓と山崎学派関係」と題する阿部先生のノート（図書資料「漢・あ・190」）が一緒に寄贈されていることを知ることができたので、ご報告しておく。

日本漢字音・辞書・字書班

主　任：佐藤 進
担当者：白藤 禮幸　谷本 玲大
協力者：大島 正二　小方 伴子

平成17年度前期活動報告

当班の実質的な活動は平成17年になってから開始し、事業を推進していく過程で計画に手直しを加えつつここまで進んできた。平成17年度当初の当班研究計画は、以下のような二本建てでいくことにしていた。

1 楊伯峻《文言文法》編訳と訓読法による処理のコメント

漢文訓読の語彙語法的なバックボーンを検証するために、中国文語文の文法体系を提示した語法書・楊伯峻《文言文法》を訳出し（研究協力者・小方伴子が担当）、そこに例示された例文が「訓読」される際に、日本の先人たちがどのような処理をほどこしたかについて丁寧にコメントして（佐藤が担当）報告書を作成するという内容である。

11月末現在の状況は、本文の訳出に関しては、原書約200ページのほぼ半分が済み、引き続き後半を訳出しつつある。また、該書に採用された例文は全てで786句であるが、テキストの入力は済んでおり、訓読文と口語訳を附し、訓読処理のコメントを加えつつある（現在、150句が完了）。この草稿入力作業は、冬期休暇あけには終了する予定で、年度末には報告書が刊行できる見込みである。

この作業過程で、以下のような興味深い訓読処理があることに気がついた。当班の作業意義をアピールする意味で紹介する。

『孟子・梁恵王上』に「寡人之於国也、尽心焉耳矣」という、文末に語気助詞「焉耳矣」が連続する構文がある。楊伯峻《文言文法》では、こういう場合には焦点が最後の一字「矣」のみにあてられると説明する。しかし、この訓読は「寡人の国に於けるや、心を尽くせるのみ」のように、「耳」字だけを読んでいるようにみえる。ただ仔細に検討してみると、「尽心」の原文について「心を尽くせる」と完了の助動詞「り＞る」をつけて読み、楊伯峻のいわゆる既定事実であることを示す「矣」のニュアンスをそこに活かす工夫が見られるのである（岩波文庫・朝日中国古典選）。非常に巧みな訓読処理になっていると言わざるを得ない。ちなみに、伊藤仁斎の古義堂本は「心を尽くす」とだけ読み、その処理はなされていない。

2 古訓データベース作成

日本製漢字字書『類聚名義抄』は和訓の豊富な字書であるが、そこに記載された和訓がいかなる漢文文脈のなかで使われたか、その実例を全書にわたり逐一指摘した研究はない。そこで、本プログラムでは、古訓を比較的多くとどめ、影印本があって利用に便宜な堀杏菴点『春秋左氏伝』と寛文年間刊六臣注『文選』ほかの訓点から、「以＝コレヲモッテ」のような『類聚名義抄』に合致する訓を検索して例示し（前者には「楚国、方城これをもって城と為し」などがある）、「親字・和訓・例句」データベースを作成する、という計画がこれである。

すでに佐藤がBig5コード字表を入力済みのエクセルファイルを作成した。それをもとに『類聚名義抄』の標出順にしたがって配列し直し（当面は『類聚名義抄』すべての標出字を扱うわけではない）、それにアルバイターが『類聚名義抄』の「和訓」と上記からの「例句」を入力する予定であるが、まだそこまでには到っていない。例句入力は主に18年度以降の計画として考えており、17年度末までには「和訓」の入力をできる限り進めたい。

さらに十八年度には16年度当初に暫定計画としてあった毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』のデータベース化を実現するべく、谷本玲大研究協力員と計画の検討を進めつつある。

日中文化交流班

主　任：佐藤 一樹
担当者：竹下 悦子
協力者：陳 捷　劉 建輝　戦 暁梅

平成17年度前期活動報告

●シンポジウム「 漢文学の近代的転回 」

佐藤が企画、組織したこのシンポジウムは、9月10日に開催され、30余名が参加した。パネリスト、および発表題目は以下のとおりである。

劉 建 輝（国際日本文化研究センター助教授）
「洋学は漢学に乗ってやってくる ―― 幕末維新期における漢文ルネサンスとその役割」
戦 暁 梅（東京工業大学助教授）
「日本近代美術史にみる漢文文化の「隠れ顔」――「文人画」を巡る諸現象を中心に
佐藤一樹（二松学舎大学教授）
「漢学者と近代学問――重野安繹とその周辺」

近代での漢文や漢文学については、これまで公教育の展開にそって語られることが多かったが、そこでは衰退の文脈で語られるのでなければ、体制教学の烙印が押されがちだった。このシンポジウムは、近代漢文の位置づけを、教育や文学の枠組みからだけでなく、学術や芸術、あるいはひとびとの人生観や社会観から問い直していこうとする試みのひとつである。劉報告は、19世紀半ばまでに中国で宣教師たちが西洋の諸概念から翻案した様々な新しい漢字熟語概念、および日本の幕末維新期の新たな漢字熟語、それぞれの相互作用を明らかにし、東アジアの言語空間での漢語、漢文がもつ意義に新たな視角を提供した。戦報告は、富岡鉄斎、岸田劉生、萬鉄五郎の3人の画家を取り上げ、彼らの創作活動の基盤に漢文に基づく教養があることを指摘し、そこから逆に、日本の文化状況や日中関係のありかたに漢文文化がいかに影響されていたかも明らかにした。佐藤報告は、近代史学の礎を築いた重野安繹や久米邦武が、よく知られる実証史学への考証学の適用のみならず、物語や戦記でも名分論による教訓でもない、実証的、客観的な歴史叙述のために、新たな漢文体や書き下し体を工夫しなければならなかったことを考察した。

●シンポジウム『論語』

シンポジウム『論語』は、竹下が中心となって企画、組織し、二松学舎大学主催で11月26日に開かれた。COE研究プログラムとも密接な関係を持つ企画であると同時に、本学COEプログラムの一般向けのPRを兼ねた漢文・古典の発揚を意図するものとして、参加者が500名以上にのぼったことは大変意義深い。シンポジウムの各報告者とその報告のタイトルは以下の通り。

中山成彬（前文部科学大臣）「『論語』と日本人」
松川健二（二松学舎大学客員教授）「日本における『論語』解釈史」
桶谷英明（文芸評論家）「『論語』と昭和の知識人」
椎木伸治（二松学舎大学附属沼南高校教頭）「高校教育と『論語』」
久保田勇夫（ローン・スター・ジャパン会長）「国際金融交渉と東アジアの倫理観」

討論において特に問題になったのは、中国の古典である『論語』と、その日本的解釈のズレについてである。『論語』に限らず古典を読む態度として、正確な解釈を求める立場と、それぞれの時代背景を背負っての解釈の幅を文化的にとらえる立場との融合点である。例えば『論語』の一章は、時代と解釈者とによって全く違った読みを持つ。それぞれの読みは、その解釈を生み出した時代と社会とを反映していると言う意味で間違った解釈だとはいえない。しかし、『論語』そのものの生まれた背景と、その時代の特徴、言語の特性を探り、古代という時代の中で『論語』を解釈することは、全く不可能なことではあるまい。そこから導き出される解釈は、あるいはいま我々が習慣的に読みなれている『論語』の「訓読」とは全く異なる場合もあるのである。解釈、或いは解釈史には、このような問題がかならずつきまとう。しかしこの問題は、とりもなおさず日本漢文学のもつ根本的な問題にも直結するものと考える。中国的な文脈、あるいはその古典を生み出した時代性と、隔絶した訓読、それが日本漢文学の特徴としてあるとするならば、日本的中国古典解釈なるもののもつ問題を考える機会としても、この討論は有効であったのではないかと考える。

●海外拠点の研究

中国との交流という点では、海外拠点リーダーの王宝平教授、および王勇教授の研究が本班の活動では必須となっている。今年度は王宝平教授が「中国における日本漢学の研究」をまとめ、平成18年3月に刊行の『日本漢文学研究』創刊号に掲載されている。

書誌学・目録データ班

主　任：高山 節也
担当者：町 泉寿郎　谷本 玲大
協力者：高橋 智　真柳 誠　小曽戸 洋

平成17年度前期活動報告

●データベース関係

データベースの構築と入力ならびに情報発信は本プログラムの基本計画であり、最優先企画といっても過言ではない。入力情報の最重点は日本漢文文献の所在情報を、各種の目録から抽出したデータとして蓄積し、これを公開することである。そのための入力システムはすでに昨年度末をもって完成しており、現在中国のデータ関係組織に依頼して、65機関約4万件のデータを入力中である。本プログラムの採用している入力システムについては、すでに通訊3号に報告してある。

現在はさらにこれを公開するシステムを検討、作業としてはほぼ完了し、現在は細部にわたって改良中である。詳細は別稿に譲るが、国立情報学研究所を通じて公開するシステムや、人文科学研究所の全国漢籍データベースとリンクする検索システムを開発した。今後は日本漢文所在データのさらなる蓄積と、データベース上での校正・補充入力の継続、さらに全文データや論文データ、あるいは語法・序跋その他、本プログラム研究上の多種多様なデータ公開に向かって、より一層の機能の充実を計ることとなろう。

●和刻本漢籍邦人序跋集成関係

本来であれば、日本漢文学関連文献における邦人序跋のすべてを網羅するデータ集積を行うべきものであるが、現時点における人的陣容とプログラム全体の運営業務のため、実際にはかなり限定して情報収集を行わざるをえず、当面は和刻本漢籍を対象として邦人序跋の収集を行うこととした。ただ、本プログラムの趣旨として日本漢詩文のみならず漢文資料全体に研究対象を拡大したことと連動して、和刻本漢籍経部と和刻本漢訳仏典および漢方医書を含めて資料収集を実施することとした。まず漢籍経部については、二松学舎大学附属図書館所蔵和刻本経部全96点を調査し、中から邦人序跋のあるもの35点を得、内閣文庫においては、これまでに経部孝経類まで111点を調査し、序跋あるもの32点を得た。なお慶應義塾大学斯道文庫においても、経部漢籍の調査が開始されている。

仏典については、平成16年11月から17年10月にかけて、成田山仏教図書館においてのべ43日にわたって調査が実施され、叢書子目を含めてのべ1059点を調査、邦人序跋のべ424点を収集した。ただしこの件数には黄檗版大蔵経巻末の募縁刊記が含まれる。

医書については、北里医史学研究部に所蔵する大塚修琴堂文庫（約2500点）を調査し、これを漢籍・和国本漢籍・準漢籍・日本漢文・和文に類別し、その結果をEAJRSにおいて報告した。今後序跋を有するものをピックアップしてデータベースに入力の予定である。

日本医家伝の刊行・『日本医譜』の電子テキスト化

現在一応の入力作業を終了した。目下、校正作業をすすめており、校正を終了した巻から順次Web上に公開していく予定である。

●日本漢文関連業績集成と情報発信

日本漢文学に関連する単行本や論文を、日本のみならず海外における成果・業績をも網羅した、総合データの構築と情報発信を目指す業務として、COEプログラム採択当初から継続して作業を進めている。平成17年12月現在の状況は以下のとおりである。

論文入力データ　和文2060件　欧文20件

単行本　336件

NDL・OPAC雑誌情報記事索引にもとづき、該当論文データを収集し入力すると同時に、和漢比較文学会叢書所収の研究文献目録を入力している。現時点で、データの入力範囲は奈良時代から室町時代に及んでいる。

'05国際シンポジウム「世界における日本漢文学研究の現状と課題」を開催して

拠点リーダー　高山 節也

研究者ネットワークの構築に向けて

2005年9月3日(土)・4日(日)の二日間にわたって、国際シンポジウム「世界における日本漢文学研究の現状と課題」を開催した。実際は、その前日の3日(金)には招聘者・コメンテーターを含めてのミーティングと歓迎会を、終了後の5日(月)には世界拠点リーダー会議を行ったので、実質としては四日間である。今回のシンポジウムは、本プログラム開始後2回目の国際会議として、世界的研究拠点としての本学の位置づけと、世界に存在する日本漢文研究者のネットワーク作りをより強固にする意味を持つシンポジウムであった。

今回は報告者として、オランダ;ライデン大学のウィレム・ヤン・ボート氏、アメリカ;カリフォルニア大学のロバート・ボーゲン氏、ベトナム;ハンナム(漢喃)研究所のグエン・チ・オワイン氏、韓国;高麗大学の沈慶昊氏、中国;浙江工商大学の王勇氏、日本は、和漢比較文学会代表の大阪大学教授後藤昭雄氏を招聘して、報告あるいは総括を依頼した。また、海外の招聘者には、コメンテーターとして、中野三敏氏(ボート氏)、石塚晴通氏(ボーゲン氏)、王宝平氏(オワイン氏)、小川晴久氏(沈氏)、ウィリー・ヴァンドゥワラ氏(王勇氏)を依頼した。

報告は、3日午後にボート氏、ボーゲン氏、4日は午前にオワイン氏、沈慶昊氏、午後に王勇氏、ならびに後藤氏の総括が行われた。

各報告者のレポートは、本プログラムの「世界における日本漢文学研究の現状と課題」に則って、各地域における現状と課題を中心に語られたが、欧米地域と東洋地域ではおのずから差異がみえたようでもある。ボート氏・ボーゲン氏の報告では、欧米においては歴史的には日本文献の翻訳を中心とした時期から研究中心への流れにあるものの、言語的制約や、より内面に突っ込んだ理解の次元にたつことの必要性など、クリアすべき課題も多いことが述べられた。これらに関連して中野コメンテーターは、訓読としての漢文文化の衰退が日本文化の継承上ゆゆしい問題であることなどを、石塚コメンテーターは日本語の造語力の源としての漢文訓読への視点を重視すべきことなどを指摘された。

東洋地域では、オワイン氏はベトナムにおける日本漢文研究はなお初歩の状態で、古典文献の翻訳と校訂によるテキスト開発などによって、今後の発展が期待されることを述べられたが、漢文そのものは研究組織においてほとんど扱われないというのが実情のようであった。韓国の沈慶昊氏の報告では、江戸期から現代における両国漢学の接点について概観し、日本漢学そのものへの興味は現状ではなお低く、翻訳なども今後の課題であること、ただ上古以来の両国の関係からいえば、人物交流と書籍流通はなおざりにできない分野であり、特に日本における朝鮮本の翻刻などについては、今後重要な研究テーマとなるであろうとの指摘があった。また中国の王勇氏は、日中両国における文献の流通の歴史に触れた上で、唐本の日本復刻を「和刻本」という表現の曖昧さを指摘する一方、日本漢文文献を中国で翻刻するものについて今後おおいに注目する必要があることを述べ、これらを「華刻本」と命名して、書籍史における新たなスタイルとして認知することを推奨した。これらに関連して、王宝平コメンテーターは補足として『ベトナム漢喃文献目録提要』等の資料を紹介され、小川晴久コメンテーターは朝鮮の誇るべき文化に対する日本人の関心を深め、朝鮮漢文の訓読を取り入れた漢文教育を始めるべきことなどを指摘され、ヴァンドゥワラコメンテーターは、ブックロードに絡めて文字資料の伝播について、それがどのようなルートをたどってどのように変貌したかを解明することの必要性などを訴えられた。

最後に後藤氏の総括と報告において、特に和漢比較文学会の活動を中心に、日本漢文学研究の必要性の認識と、それにともなう日本漢文資料の翻刻の増加について触れ、これらが今後の研究の進展に多大の寄与をなすものであることを指摘した。さらに総括として非漢字圏における翻訳の比重の高さと、漢字圏の書物の物としての流通への視点の重視において、日本漢文学は広く漢文文献として取り扱う必要があるとの指摘がなされた。

世界における日本漢文学の現状認識と今後の課題を検討する上で、今回得られたこれらの知見は、具体的であり且つ即効性を孕む貴重なものであったと思う。ただいずれの報告者もとまどいを見せたのが、日本漢文学という言葉の内実であった。また多くの場面で指摘のあった訓読に対する注目をも含めて、これらを今後どのように再認識し、さらに新たな発想をそこに加味してプログラムを統合していく中心線とするか、メンバー一同に課された課題であるといえよう。

平成17年度COE海外拠点リーダー会議を開催して

調整担当者　白藤 禮幸

研究者ネットワークの構築に向けて

本プログラムの事業の一つに、日本漢文学の研究者を世界的規模において組織化し、ネットワークを作り上げることがある。そのためには、海外のこの分野の研究者を調査することが第一の作業となる。そのような見地から、担当者が個人的にもっている人的関係にもとづいて、本プログラムの趣旨と目的を説明し、理解と協力を依頼した。その中で、協力を表明してくださった方に、その地の拠点リーダーを委嘱し、平成17年9月5日（月）午前9時30分から、二松学舎大学九段校舎11階会議室において、国際シンポジウムの開催に合わせて、第1回COE海外拠点リーダー会議を開催した。

出席者は次のとおりである。

中　国　王　勇（浙江工商大学）
　　王宝平（浙江工商大学）
韓　国　沈慶昊（高麗大学校文科大学）
台　湾　黄俊傑（台湾大学）
　　張宝三（台湾大学）
ベトナム　グエン・チン・オワイン（ハンノム研究所）
タ　イ　サオワラック・スリヤオウオンパイサーン（チェラロンコーン大学）
ベルギー　ウイリー・ヴァンドウワラ（ルーヴァン・カトリック大学）
アメリカ　ロバート・ボーゲン（カリフォルニア大学）
日　本　後藤昭雄（大阪大学）
　　石塚晴通（COE客員研究員・北海道大学名誉教授）

本学からは、佐藤保理事長・今西幹一学長・石川忠久前学長・白藤禮幸総括責任者・高山節也拠点リーダーと、事業担当者の中から青木五郎・小川晴久・佐藤進・磯水絵・佐藤一樹が出席した。

挨拶のあと、議長の高山拠点リーダーから、本プログラムの目的・計画・事業内容について、以下のような説明があった。

日本は、中国の漢字が伝えられてようやく歴史時代に入り、漢字・漢文によって日本の学術・文化の根幹が形成され、東アジア漢字文化圏の一翼を成すこととなった。本プログラムで言う日本漢文学とは、従来のような、日本文学の一分野であるものに止まらず、歴史・思想・仏教・科学などすべての分野にわたる、日本人の手に成る漢字・漢文文献のすべてを指し、更に、日本人による漢籍・仏典の研究、漢文訓読、和刻本をも含むものと定義した。日本の学術研究の歴史において、前近代には盛んであった漢学が、明治以後の西欧化のなかで、等閑視されてきた。二松学舎の建学は、そのような風潮に歯止めをかけるためであった。その使命は、今日ますます切実なものとになっている。

他方、海外の諸国においても、近年日本の学術・文化に対する関心が高まり、日本研究が盛んになりつつあり、その中で、日本漢文学研究の重要性も改めて認識されてきている。日本漢文学研究の今後の発展とその深化を目指すには、内外の研究者が連携し情報を交換し、協力してレベルの向上を図る必要がある。そのための組織を構築することが、本プログラムの目的の一つである。

役割としては、

1.各地域における関連研究の現状と課題の把握およびそれらの情報発信
2.当該地域における研究会・研究調査の企画および開催
3.定期的に開催する世界会議への参加
4.機関誌「日本漢文研究」の編集（依頼原稿の作成、投稿論文の査読等）に関すること。
5.その他、日本漢文研究に関すること。

が挙げられた。

出席者からは、各地での状況や研究環境についての報告があった。タイのサオワラック教授からは、タイの大学での日本文学教育・研究の状況について、漢文学については皆無というのが実情であり、むしろ、日本から専門家が教育・講演のために訪タイされることを希望する、という発言があった。中国の王勇教授からは、日本漢文のテキストのネットによる提供を二松学舎のこのプログラムに期待したい、という要望が出された。ベルギーのヴァンドウワラ教授からは、その主宰されているEAJRS（European Association of Japanese Resource Specialists）の活動についての説明があった。ベトナムのオワイン教授からは、ハノイのハンノム研究所の資料の現状について調査協力の要請があった。韓国の沈教授からは、本プログラムでの、韓国漢文学の位置付けについての根本的な問題点の指摘があり、我々日本人研究者の認識の在り方に関して重要な提言となった。

海外での研究者の糾合は、まだ不十分で、現時点では狭義の日本文学の一部門としての日本漢文学の研究者が主であるが、今後は歴史学や仏教学、哲学などにも範囲を広げ、より広いネットワークを構築しなければならない。それには、研究資料や研究書・研究論文についての情報のデータ・ベースの充実・作成が必要である。海外に協力を要請するばかりでなく、日本からも、漢文資料や国内の研究情報を整備し、発信できる体制を作り上げることが、協力関係の維持、発展のため、必須であろう。

第4回中文文献資源共建共享合作会議

事業推進担当者　町 泉寿郎

国際会議等に参加して

2004年11月15日から18日まで、中国・南京市は中山陵にほど近い南京国際会議大酒店において、南京図書館の主催による第四次中文文献資源共建共享合作会議（The 4th Conference of Chinese Resources Cooperation and Development）が開催された。筆者は同会議に参加し、中国各地の主要図書館が連携して取り組んでいる資料のデジタル化・データベース化に関するプロジェクトの現状報告を聞き、あわせてわれわれのCOEプログラムについて説明して、参加各位の理解と協力を求めた。

同会議については、同じく日本から出席した鴇田潤氏（国立国会図書館関西館資料部アジア情報課アジア第二係長）の報告が簡要を得ているので、参照されたい（『国会図書館月報』528号、2005/03）。

中文文献資源共建共享合作会議について

この会議は、日本語では「中国語文献資源共同構築・共同利用協力会議」と訳されている。90年代の両岸四地（中国・台湾・香港・マカオ）の図書館交流を発端とし、第1回が2000年の北京国家図書館、第2回が2001年の台湾国家図書館、第3回が2002年のマカオ中央図書館の主催で行われ、SARSによる延期をへて、今回が4回目である。

発足当初から以下の8つのプロジェクトを掲げ、主要図書館がいわばそれぞれの得意分野を生かして事業に取り組んでいる。IT技術を前提とした、役割分担と連携による世界図書館への潮流をはっきりと看取するとともに、われわれの担うべき役割についても自省を促されることしきりであった。

「古籍聯合目録データベース」（台湾国家図書館、顧力仁氏報告）
「中文名称典拠データベース」（北京国家図書館、香港嶺南大学図書館、北京大学図書館-中国高等教育文献保障系統管理中心CALIS-）
「孫中山デジタル図書館」（中山大学図書館）
「中文石刻拓片データベース」（北京国家図書館、台湾中央研究院）
「図書館情報学用語典拠データベース」（中国科学院文献情報中心）
「中国家譜総目」（上海図書館）
「中国版印図録」（北京国家図書館、李致忠氏報告）
「中国科技史デジタル図書館」（清華大学図書館）

筆者の報告要旨　―日本学のための漢文研究―

われわれのプロジェクトがめざす日本漢文学研究は、日本に伝えられた漢字漢文文献の総合的に研究しようとするものである。漢字漢文文献は、前近代日本の学術文化の根幹に位置し、日本研究の基礎をなすべきものである。しかしながら漢文は近年、日本文学の対象としても、中国学の対象としても（中国語の普及とともに）疎外され、危機的状況にある。日本漢文学を対象とする専門研究機関は存在せず、このことが日本漢文・準漢籍・和刻漢籍の厖大な資料群を十分に研究対象としえない状況を招いている。よってわれわれは、日本漢文文献を対象とする独自の研究体制の必要性を自覚し、日本漢文文献と日本漢文に関する研究を世界規模で集約し、同時に日本の漢字文化を内外に発信する日本漢文学の研究拠点をめざす。

その実現のために以下の4つの計画を推進する。①日本漢字漢文文献の世界規模での所在調査とデータベース化。②国際シンポジウム開催などをとおした、世界的な日本漢文学研究のネットワークづくり。③若手研究者・書誌調査の専門家の養成。④漢文教育の充実と振興のための漢文教科書の編纂。

われわれの研究目的は、あくまで日本学のための漢文研究であるが、中国側から見ればそれも漢字文献（域外漢籍と呼ばれる）であるとの認識は理解できるので、データベース等をとおして、情報の交換・共有をはかっていきたい。

この報告から約1年をへた現在の進捗状況をふりかえると、以下のとおり、研究基盤が整備されつつある。
①:データベース化は、日本漢文文献の目録データベースがほぼ計画どおり進行し、近く詳細版を本プログラムのHP上で、簡易版を国立情報学研究所のHP上で、公開する予定である。今後は、目録入力の継続とともに、目録以外のデータベース化が必要と考えている。②:研究ネットワークづくりは、2004・2005年度の国際シンポ・講演会実施や国際会議参加により、世界各地の日本漢文の研究状況を着実に把握しつつある。③:研究者養成は、講座の充実により養成体制の整備をはかった。④:漢文教科書は、江戸明治期の漢詩・漢文の教科書などを近く刊行予定である。

今後は、データベースをはじめとする、われわれの研究計画の現状と将来構想を紹介し、広く意見を求める機会を増やすよう努めたい。

（謝辞）この場を借りて、貴重な会議への参加を強く薦めて下さった呉格教授（復旦大学図書館・古籍所）に感謝の意を表します。

北京大学主催・国際学術会議「北京論壇2005」

ＣＯＥ顧問　戸川 芳郎
事業推進担当者　町 泉寿郎

国際会議等に参加して

2005年8月、北京大学哲学系の湯一介教授から白藤禮幸本プログラム総括責任者あてに、国際学術会議「北京論壇（Beijing Forum）2005」への招請状が届いた。世界規模で儒教典籍を収集・編纂して大規模な叢書を編纂しようという「『儒蔵』の編纂と研究」プロジェクトへ、の参加を呼びかける内容であった。協議の結果、編纂計画に「日本漢学」が組み入れられていることから、本プログラムが調査研究対象とする、「日本漢文」の存在とその意義をひろく世に問う好機と考え、会議への参加を応諾し、戸川・町両名が参加することとなった。

同会議は、2004年から始まり、今回はその第2回目である。2005年11月、16～18日の3日間にわたり、経済学・歴史学・国際関係・哲学・大衆文化・環境衛生の6部門に分かれて開催された。総合テーマは「文明間の調和とすべての繁栄―グローバリゼーション時代におけるアジアの好機と発展（文明的和諧与共同繁栄―全球化視野中亜州的機遇与発展　The Harmony of Civilizations and Prosperity for All）」を掲げている。韓国高等教育財団から資金援助を仰いでいる点が注意を惹いた。

16日午前の開会式と基調報告は、人民大会堂大宴会庁を会場として開かれ、聴衆は約1000人を数え、ひな壇に居並ぶ面々は全人大副委員長・北京大学長等の主催者側のほか、概して中・米・韓の人々が多く（日本側の姿は無く）、ジョージ・ブッシュ元米大統領が開会演説に長広舌をふるったのが印象深かった。

分科会は北京飯店を会場として、16日午後から始まり、我々が参加した哲学部門では、「東西の哲学の対話」・「儒教とキリスト教の対話」・「イスラム文明と西洋文明の対話」・「『儒蔵』の編纂と研究」（17日午後）の4セッションが行われた。ほかに経済学部門では「東アジアの製造業の発展」をテーマとして3セッション、歴史学部門はさらに3分科会（世界文明史、東アジア古代・中古、東アジア近代）に分けて各3セッション、国際関係部門は米中関係にしぼって2分科会で各3セッション(アジア太平洋地域問題・経済協力・安全保障)、大衆文化部門は3セッション、環境衛生部門は3セッション(慢性疾患・環境と健康・新型感染症)が開催された。こうして各分科会を列挙するだけでも、この大規模な国際会議の主たる目的がどのあたりにあるかが推知されよう。

日本からは経済には長谷川聰哲ら、歴史には三谷博・狭間直樹・斯波義信・杉山正明・岸本美緒・紀平英作、哲学には佐々木力、大衆文化には末木文美士・飛田良文・島村輝らの各氏が参加された。また本プログラムとご縁の深い王勇氏も参加報告された（大衆文化）。

我々が参加した「『儒蔵』の編纂と研究」セッションでは、湯一介氏を座長として、安平秋・孫欽善（北大中文）、彭林（清華大歴史）の各氏、また本プログラムの海外拠点リーダーである黄俊傑氏（台湾大）、昨年本学でスピーチされた杜維明氏（燕京研究所）、さらに稲畑耕一郎氏（早大、北大客員）、橋本秀美氏（北大歴史）らが参加し、『儒蔵』編纂の意義とその具体的な編纂計画について討議した。

『儒蔵』編纂計画はⅡ期に分けられ、第Ⅰ期「精華編」では中国書500部と出土資料・海外文献からなる叢書を2010年に完成する。この海外文献には、日本・韓国・ベトナムあわせて100部以内を収録する予定であり、その選定と編纂作業は各国に分担してもらいたい。すでにベトナムは10～20部を選定しており、日本からは30部程度の代表的な日本の文献を選定して欲しいとの趣旨であった。

我々は本プログラムの事業の一環として編纂中であった『江戸漢学書目(稿)』(約9000部著録)を提示して、江戸期を中心とした日本における「漢学」の蓄積の厖大さを紹介するとともに、これ以外にも日本における漢文が経史子集にわたる広がりを持つものであることに注意を喚起し、早い段階で選定案を提示すべく、帰国後、文献の選定作業に入ることを表明した。

なお、『儒蔵』第一冊は、すでに刊行されており、「精華編　四書類論語属」（北京大学出版社）として、何晏「集解(正平版)」・皇侃「義疏」・邢昺「註疏」・朱熹「集注」・康有為「注」が校点を施して収められている。このうち前三書の底本はすべて日本伝蔵の書本であって、ここに我が国の蓄積が中国研究に果たすべき貢献を自覚しつつ、他方、日本において厖大な中国古典籍がどのように受容され理解されてきたか、そしてそれが現在の我々の学術文化にどのような影響を及ぼしているのか、という「日本学研究としての漢文研究」の主体的な視点の確立を、あらためて考えさせられた次第である。

今回は、資料調査の時間的な余裕が無かったのは残念であったが、孫建軍・丁梨・王美秀・雋雪艷の各氏をはじめ、多くの研究者と有益な交流をもったことを言い添えたい。

(謝辞)この場を借りて、本プロジェクトへの参加を推し進められた稲畑耕一郎氏、通訳の労を尽された橋本秀美氏、にともども感謝の意を表します。

第16回EAJRS（欧州日本文献専門家協会）年次総会

事業推進担当者　町 泉寿郎

国際会議等に参加して

スウェーデン・ルンド大学を会場に開催された、欧州日本文献専門家協会-European Association of Japanese Resource Specialists-（以下EAJRS）の第16回年次大会に、筆者は高山節也拠点リーダーとともに参加した（2005.09.21～24）。現在、同協会はベルギー・ルーヴァンカトリック大学のヴァンドゥワラ教授が会長を務めており、本プログラムでは本年1月の公開講演会、および9月の国際シンポジウムに教授を招聘し、海外拠点リーダーに就任していただいている。そこで、欧州各国から日本文献の専門家（大学教員・図書館員・学芸員）が一堂に会する場で、われわれの掲げる「日本漢文学研究」の対象・目的・計画を説明し、理解と協力を要請したいと考えた。

EAJRSは、EAJS（欧州日本研究協会、会議は3年に1度開催）から分かれて、1994年のボン大会から年1回、毎年9月末に国際交流基金の援助を受けて会議を開いている。今回の参加者は計71人で、内訳はフランス8（8機関）、イギリス7（6）、ドイツ6（5）、アメリカ4（3）、イタリア2（2）、ベルギー2（1）、デンマーク・ノルウェー・スペイン・オーストリア・オランダ各1（1）。開催国スウェーデン13（6）。日本24（16）。

報告は、4日間にわたり計26題、各30分、英語または日本語（英語対訳）で行われた。国立情報研・京都日文研・東大総合図書館・ベルリン国立図書館・イタリア日本文化研究所・オクスフォード大学ボードリアン日本研究図書館等の機関からは、資料電子化の取り組みについて報告があった。他にラウラ・モレッティ講師（フォスカリ大）の仮名草子分類の可否、小山昇司書（ケンブリッジ大）の明治前期日本の写真コレクション、ペーター・パンツァ教授（ボン大）の川上音次郎の欧州公演、、山中秀夫助教授（天理大）の日本古書資料のためのレコードフォーマット、などが報告された。

われわれは、高山リーダーが「日本漢文学とその文献について-ヨーロッパにおける所在調査と関連して-」と題して、主に判定の難しい準漢籍の定義について報告した。日本を離れて長い在欧日本人司書の方々を中心に、漢文振興への期待や漢文資料に関する情報が多く寄せられた。筆者は「日本漢文資料と古医書の接点-北里研究所所蔵資料から-」と題して、漢方資料の文体別分類について報告した。

参加者との情報交換によれば、近年の欧州の日本学研究の動向として、1960～70年代に中国部門から独立した日本専門の司書・学芸員が再び統合等によって減少傾向にあり、日本資料関係者の危機感は強い。大学の日本学科はサブカルチャーの影響で人気が高いものの、これも大学組織全体としては、統合の傾向にある、と。日本学の窓を通して、欧州の伝統的な大学・図書館のありかたが曲がり角に来ているさまを垣間見た気がした。

会期前後を利用して関連分野の研究者と交流すべく、コペンハーゲン大学にマルガレーテ・メール助教授を訪ねた（09.20）。メール氏は学位論文となった明治の漢学塾に関する近著で、二松学舎を取り上げている。なおメール氏の師のヨーゼフ・クライナー教授（ボン大学）は、所謂ウィーン学派に属し、現在、欧州各機関所蔵の日本の器物資料の目録を編纂中である。

さらにベルリン日独センターに桑原節子部長を訪ねた（09.25）。同センターは日独の共同出資により西ベルリン旧日本大使館内に作られ、東西統一によってダーレム近郊に移転。日独の学術交流セミナーの企画等を行っている。ドイツの日本資料所蔵機関・日本研究機関について、情報を得た。

資料調査としては、東京のドイツ-日本研究所（独出資）でエヴァ・クラフト（ベルリン国立図書館元司書）編にかかる日本古書資料目録によって事前調査し、ミュンヘンかベルリンか迷った挙句、ベルリン国立図書館東アジア部を調査した。戸川浜男・林若樹・大野酒竹・島田筑波ら、大正昭和初期の蔵書家の旧蔵資料が多く、ペーター・フィッシャー主任等と情報交換しつつ、蔵書の移動についてさらに調査を継続していきたいと考えている。

最後に、閉会式（09.24）においてヴァンドゥワラ会長は、従来EAJRSは欧州・米国・日本からの参加者によって開催してきたが、今後は中国・台湾にも参加者を求めたい。幸い、二松学舎はこの方面に人脈を有するので、協議していきたいと述べられた。本プログラムによる「日本漢文」研究を推進することを通して、従来余り交流のなかった中国と欧州の日本学研究者の交流促進に寄与することは、われわれが掲げる研究者ネットワーク構築の一斑が実現されたことにほかならない。今後ともEAJRSの活動に積極的に参画していきたいと考えた次第である。なお次回は2006.09.27～30にヴェネツィア・フォスカリ大学で開催の予定。

法鼓山中華仏学研究所を訪ねて

COE研究員　會谷 佳光

国際会議等に参加して

中華仏学研究所(以下「仏学研」)は、高度な仏教教育と国際的な仏教学術研究を行う目的で、1985年に聖厳法師によって中華民国台北市北投区(現在は台北県金山郷に移転)に創立された。このたび仏学研からの招聘を受け、平成17年6月26日(日)から30日(木)にかけて、本学COEプログラムの調査の一環として訪問させて頂いた。

当初は版本調査を行う予定だったが、仏学研では、中華電子仏教協会CBETA(シベタChinese Buddhist Electronic Text Associationの略)によってデジタル化された仏教関係資料を利用して、いかに有効に教育・研究を行っていくかという点に事業の重点が置かれているため、その収集対象は個別の版本ではなく、現在も続々と公刊中の各種大蔵経や活字資料がほとんどであって、版本の現物は皆無に近かった。よって版本調査面における成果はなかったものの、CBETA総幹事をつとめる仏学研図書資訊館杜正民館長からCBETAの活動内容について詳細な説明を受けた。そこで、この点を中心に報告を行うことにしたい。

CBETAは、1998年に成立された組織であり、現在、仏学研の恵敏副所長が主任委員となっている。杜正民館長のお話では、今まで木・石・紙等で保存されてきた文献をデジタル化して保存・流通させ、利用者に有用な情報を提供することが目的であり、それによって、これまで多大な時間を要した資料収集が効率化されるだけでなく、質・量ともに充実した研究成果が生み出せるようになり、研究方法に新しい時代が到来するとのことである。現在はデータベースの作成から、その利用法・運用法に重点が移行し、仏学研でも印度仏学・中国仏学・チベット仏学の三専攻の他に仏教デジタル化専攻が開設され、デジタル化事業を担う人材の育成が行われているそうである。CBETA製作のデータベースについては、すでにHP上で公開されているので、改めて説明する必要はないが、大正蔵第1巻～第55巻及び第85巻、卍続蔵経第63巻～第73巻(禅宗著述)及び第78巻～第87巻(禅宗史伝)のデジタル化が完成し、本年2月にCD-ROM形式で公刊された。

デジタル化の実務組織は、①輸入組(データ入力、Scan OCR、その他資料の捜索)、②校対組(画像を使った入力データの校勘)、③研発組(異体字・文字コード問題の処理)、④資訊組(利用法の検討)、⑤網路組、⑥欠字組(外字・悉曇文字の処理)の六組織からなる。デジタル化の際に懸念されるテキストの精度については、全世界五万人の協力者が公開データの誤りを報告してくれるので、誤りの発生率は万分の一とのことである。今後は、五年間で卍続蔵経全巻デジタル化の完成を目指し、その後に、大正蔵・卍続蔵経デジタル化の経験を生かして、敦煌文献のデジタル化に取り組む予定だそうである。

この他に、HP上で公開中の「書目検索」(研究文献データベース)には、十万件以上の仏教関係論著が登録され、なかには本文が全文デジタル化されたものもあり、論文中の引用文献をCBETAの仏典データベースとハイパーリンクさせ、研究者の便を図るという計画を進行中とのことである。また仏学研には台湾日拠時期の資料が豊富にあり、そのほとんどが全文データベース化されている。

また仏学研では最近になって仏教経典目録(以下「経録」)のデジタル化計画が開始されたとのことであり、担当者の一人釈振溥尼から計画の全貌をお伺いできた。デジタル化の行程は、①現存蔵経目録(現存の寺蔵目録等)、②蔵経目録工具書、③古経録(大正蔵第49巻・第55巻及び昭和法宝総目録所収の経録)の順で行われ、最終的にはCBETAのデータベース全体とハイパーリンクで結ぶ予定だそうであり、図資館には②の蔡運辰『二十五種蔵経目録対照考釈』の手稿本という貴重な資料も所蔵される。なお29日には、経録デジタル化計画と関連して、「『新唐書』芸文志釈氏類と経録の関係―唐釈道宣『大唐内典録』と『続高僧伝』」の題目で、唐・道宣撰の『大唐内典録』という経録及び『続高僧伝』と、『新唐書』芸文志釈氏類との関係について講演させて頂いた。

28日には、台湾大学の張寶三教授に面会し、図書館、及び館内の仏学数位図書館暨博物館・特蔵組珍本室等をご案内頂き、図書館所蔵の未整理の和刻本のことなど貴重なお話をお伺いできた。

最後に、中華仏学研究所の李志夫所長、杜正民館長、通訳を担当頂いた果暉法師をはじめ、今回の訪台でお世話になった台湾・日本の関係者各位に、この場を借りて深甚の謝意を申し上げたい。

「日本漢文学書誌データベース」検索システムの構築

COE研究協力者　上地 宏一

データベースの構築に向けて

『雙松通訊　第3号』「書誌学・目録データ班　平成17年度活動計画」で述べられている書誌情報データベースについてデータ公開・検索システムが完成した。システム構築協力者として概要を紹介する。

検索システムは、キーワードを指定して検索を行う「簡易検索」と、書誌レコードの各項目を細かく指定して検索を行う「詳細検索」の2方式を用意している。各項目の内容については『雙松通訊　第3号』で紹介しているのでここでは割愛する。

●本データベースの特性とそれに由来する諸課題の解決

本データベースの登録データは、その多くはすでに目録化されたものであり、目録が異なれば情報項目や記述方式には差異がある。昨年度本データベースの書誌情報登録項目を決定する際はこの特性を加味した結果、従来の書誌データベースとは異なり、必須項目や項目記述形式の制限をゆるやかなものとしているが、これは逆に検索時に必要なデータを得にくいという特徴を持つ。また、本データベースは、日本のみならず、広く世界に公開することを目的としているため、日本語以外の言語による検索への対応が求められる。さらに、二松学舎大学の所有するデータベースだけでなく、他機関のデータベースとの連携も視野に入れているため、その対応も必要となる。これらをまとめると以下のような7つの課題をクリアすることになるが、この度諸課題に対応したデータベース検索・公開システムを構築した。

○データの特性に由来する課題

1　刊年の元号暦・西暦の表記のゆれへの対応

2　著者名の雅号・別称の表記ゆれへの対応

3　新旧字・異体字の表記ゆれへの対応

○内部文字コードの特性に由来する課題

4　地域別漢字分離による検索もれへの対応

5　ラテン系アルファベット拡張文字への対応

○大規模データベース構築に由来する課題

6　非漢字圏利用者への対応

7　他機関所蔵データベースとの連携への対応

●刊年異表記への対応

本システムでは検索において資料の刊年を指定する際に、西暦と和暦の双方に対応している。和暦は自由記述であるので「平成丙戌」「平成十八年」「平成一八年」「平成18年」「平18」「H18」いずれも指定可能である。また、和暦だけでなく明代以降の中国や東アジア圏の元号にも対応している。登録データそのものが元号暦で刊年を表記していることが多いが、内部で自動的に西暦に変換して保持することで検索を可能としている。

●著者名別称への対応

例えば「荻生徂徠」を検索キーワードとして指定したときに「物茂卿」や「荻生双松」と記述されているレコードを検索できないことは問題である。このため、本システムでは国立国会図書館の許諾を受けて「著者名典拠録」データベースの一部である約1万件の別称情報を人名同定に利用している。

●異体字問題への対応

文字コードで問題となりやすい「二松学舎」と「二松學舍」、「頼山陽」と「賴山阳」のような異体字の同定に対しては、東京學藝大学松岡榮志教授が作成し、情報処理学会試行標準IPSJ-TS 0005:2002として制定されているBUCS（International Basic Subset of UCS）を用いる。これにより、新旧漢字や中国簡体字・繁体字に関係なく検索を行うことが可能となっている。また、データベースには欧米学者の論文なども登録されていることから、アクセント記号付き文字などの特殊アルファベットに対しては、基本アルファベット26文字のみで検索できるような文字の同定を行っている。

●非漢字圏利用者への対応

現在一般的に利用されているパソコンとしてWindows XPやMac OS Xなどがあるが、これらは非漢字圏のパソコンであっても漢字の表示機能については標準で対応している。しかし漢字やかなの入力については文字スキルの問題もある。そこで本システムではローマ字表記によるキーワード指定に対応している。ローマ字で入力されたキーワードは自動的にかなに変換されてデータベースの「よみ」の項目に対して検索が行われる。

●他機関データベースとの連携

国内外における既存の書誌データベースとの連携について、現段階では京都大学人文科学研究所の「全國漢籍データベース」との連携を実現した。具体的には、指定した検索キーワードに対して、二松學舍の所有する書誌データに加えて「全國漢籍データベース」への同時検索を行うようにした。

●今後の予定

検索システムの更なる改良と登録データの拡充を行い公開する。さらに、以下の拡張を予定している。

○他機関データベースにおいて日本漢文学と無関係なデータの自動除去

○ヒットしたレコードに対する関連資料（同名、叢書等）の表示

○版面画像、全文テキストの追加

今後は、利用者の忌憚の無いアドバイスをもとに更なる改良を加えたいと考えている。

漢文・訓読と字体と典籍と

COE客員研究員　石塚 晴通

研究レポート

平成16年秋から、本COEプログラムの客員研究員として事業に参加している立場から本事業と関連深い活動を報告する。

1.漢文訓読

本事業のテーマである「日本漢文学研究」は、漢文の訓読によって支えられて来たことを特長としている。漢文訓読は、漢文を自言語で理解することでは翻訳と似るが、漢文の原表記を残したままで其れに依りかかりながら自言語で理解するという点で、翻訳とは異なる。漢文訓読は、日本語のみで行われたわけではなく、他言語による訓読も行われた。漢字文化圏で漢文を訓読した記述は7世紀頃から有り、実際に訓読した資料は8世紀のものから現存している。訓読の方法・程度は各言語により異なっており、それらを国際的視野から解明する国際会議を、下記の如く開催して来た。

①1986 Hamburg、②1996 Seoul、③2001札幌
④2001 Seoul、⑤2003富山、⑥2004 札幌
⑦2005東京、⑧2005 Seoul

漢文訓読が最も発達して現在でも行われているのは日本語の場合であり、研究面でも1954年に訓点語学会を発足させ日本語史研究の主分野として半世紀を越す活動をしている（会員数四百数十人）。韓語訓読では、上記②の開催に前以て口訣学会が発足し、近時新資料の発掘も相次いで韓語史研究を溯る分野として活況を呈している（会員数二百数十人）。ウイグル語訓読、ヴェトナム語訓読も、研究者は少数ながら、着実な進展を見せている。

日本には豊富な訓点資料が現存するにも関わらず原本を解読する研究者が少ない現状に鑑み、本COEプログラムと訓点語学会との共催で訓点資料解読講習会を、2006年2月16・17日に本学九段校舎702教室に於て実施する（参加費無料）。

2.漢字字体データベース

筆者は、各時代・各地域（国）に漢字字体の標準が存在すること、そしてその標準は時代・地域（国）により変遷すること、を明らかにする目的で、二十数年間に亘り68文献約40万用例から成る「石塚漢字字体資料」を作成して来た。各時代・各地域の漢籍・仏典・国書の典籍として標準的な文献（楷書体）を選定し、その全用例の字体を整理してデータベース化することを内容としている。これらを学界共有の資料とすべく、有志との共同作業として、これら資料の画像データベース化・オンライン化に取り組んで、「漢字字体規範データベース（略称HNG）」として2005年3月からその一部を公開している（http://jcs.aa.tufs.ac.jp/HNG/）。現在公開しているものは、以下の16文献の異り字数3,638字種、総用例136,390字である。

①今西本妙法蓮華経巻第五　671写、②守屋本妙法蓮華経巻第三　675写、③s2577妙法蓮華経巻第八　7世紀末写、④上野本漢書巻第五十七 初唐写、⑤開成石経論語 837刻、⑥開成石経周易837刻、⑦東禅寺版阿毘達磨大毘婆沙論巻第百七 1100刊、⑧斉民要術巻第五 北宋末刊、⑨開元寺版道神足無極変化経巻第四　1126刊、⑩南宋版華厳経内章門等雑孔目巻第一　1146刊、⑪和銅経大般若経巻第二百五十 712写、⑫高山寺本金剛頂大教王経巻第一 815写、⑬岩崎本日本書紀巻第二十四　10世紀写、⑭東禅寺版写仏説大教王経巻第一　12世紀写、⑮謙方本日本書紀巻第二 1286以前写、⑯慶長勅版日本書紀巻第二 1599刊

本データベースにより、初唐標準字体の存在、初唐標準字体と異る開成石経標準字体の存在、南宋版に至って開成石経標準字体が定着、日本の古写本は初唐標準字体を基本として開成石経・南宋版標準字体の導入は部分的で慶長勅版に至って初めて本格的に取入れられたこと等が見て取れる。引続き、2006年に3月には初唐標準字体の淵源及び日本書紀資料、2007年3月には朝鮮半島・ヴェトナム資料を含む資料の公開を予定している。

3.典籍の国際交流

漢文典籍の輸入に関する目下の問題点を、石塚晴通代表『典籍の国際的交流・受容（訓読）』国際ワークショップ2002に於て討議し、漢文典籍の輸出に関しては、石塚晴通「中国に伝存する日本古写仏典―高山寺旧蔵本を中心として―」、『中国に伝存の日本関係典籍と文化財』国際日本文化研究センター、2002石塚晴通「敦煌文献中混入日本抄本及偽抄本」、『新世紀／敦煌學論集』巴蜀書社、2003に於て公表し、引続き漢文典籍の多岐に亘る国際交流の種々相についての調査を進めている。その中で、中国湖北省博物館蔵楊守敬旧蔵日本経巻解題目録と同館蔵楊守敬『隣蘇園目録』全文翻刻が、2006年度に共に中国で刊行見込に至ったことは慶事である。特に後者は、今後の研究の基本資料を提供するものである。

長沢博士『和刻本漢籍分類目録』以後

COE客員研究員　中野 三敏

研究レポート

概ね五山版に始まる和刻本の總体を通覧する試みは、中村幸彦博士の「和刻本」（大修館版『中国文化叢書　九　日本漢学』所収）に見え、江戸期におけるその刊行の実際は、長沢規矩也博士の『和刻本漢籍分類目録』が微細を尽くしている。特に後者は、博士自身、公私の図書館は勿論、殆んど全国の古書肆の倉庫の中までを調査し、一点一点を実見し、その版種を確かめて作成されたものゆえ、その記載内容には絶大の信を置き得るものと思う。私自身も博士の古書肆巡りに御伴した事も幾度もあるが、何れの場合も店頭に何がしか置かれた書物には殆んど目もくれず、そのまま倉庫に直行して山積みに散乱する書物を手際良く整理し乍ら、時おりノートを採られるのが常であった。漢籍は一部多冊数が普通なので、まずは外型で分別し、更に表紙の色で分け、最後に巻数を揃えると、瞬ち一組づつの区別が出来る。従って博士の調査後は、倉の中が綺麗に整理されて、大・中・小の山が出来、本屋も喜び、再三の訪問も却って歓迎される……と、これは博士御自慢の述懐を何度か拝聴し、実見もした。従ってその『和刻本目録』は独りの目で確認したものだけが著録されることを最大の特徴としている。（当り前の様だが、文庫調査の目録作製など、多人数のチームで行うのが常である。）極く希に、単に書名のみで「未見」と記されているものがあるが、これはいわば詳記される部分は凡て実見の上の記述であることの保証でもあり、該目録の価値を一層高める所以でもある。

博士は生前『国書總目録』の刊・印・修の不備をしばしば批判された。それは余りに厳密に過ぎる言表として、如何かと評される向きもあったが、博士の該目録の公表は、それに対する自からなる解答でもあったと見るべきであろう。「未見」という記述はそこに博士の絶大の自信が籠められた記述なのである。

一方また、旧刊本・古活字印本、及び医書と仏書は除外した旨も、「凡例」冒頭にそれぞれ理由を明記して述べられる。要は一個人の為し得る範囲は限度があるので、該目録の如きを絶対不可欠な基本姿勢とした上で、あとは後人の知見の附加に委ねる御つもりであったろう。私なども及ばずながらこの誘掖を拳々服膺して、文庫調査などの折々には該目録を携行し、未見項目を一つでも埋めることを願うのを常としている。

以下、その僅かな実例を挙げる。但し「経部」「史部」には殆んど事例を持たぬが「子部」「集部」については若干の補足が可能である。特に「子部」の「芸術類」と、「集部」の「總集」や「詩文評類」などに散見する。

「芸術類」の「法帖」部は特に項目そのものが圧倒的に少ないように思う。和刻法帖の種類は江戸期を通じておそらく千種は下るまいから、或いは医書や仏書の除外と同じ理由で、利用者層が違うと見ての除外が、凡例に書き洩らされたのかもしれぬ。或いは四庫分類に配慮して、純粋な法帖は除き、若干でも考証を伴った書学書のみに限定されたかとも思うが、小島知足の「唐太宗屏風書釈文」が入っているのに、同人の「淳化法帖釈文　半二　天保十五序刊」は見えず、更に同類の「法帖釈文　大一　寛延三刊（京　田中庄兵衛）」も見えぬ。遜過庭の正続書譜の和刻である「書法類釈　大一　元文四刊（京　藤屋甚兵衛）」も同様。

「画譜」の項でも「苦瓜和尚画語録（知不足斎叢書）」中一　文化十一刊（和歌山　綛田屋平右衛門）」が見えず、「竹譜詳録」はあるが、「李用雲竹譜　大一　明和八刊（京　梅村宗五郎）」や「同　享和二求板」「同　明治刷（京　芸艸堂）」。「梅道人墨竹譜　大一　寛延四刊（大坂　柳原喜兵衛）」「同　大坂河内屋儀助求板」「呉照隠墨竹譜　極大一帖（板表紙）万延元刊（京　吉田治兵衛）」がない。蘭譜では「陳愚谿蘭譜　大一帖」や、忍海上人摸「有山堂画譜　大一帖（正面版）　宝暦十二刊」が見えず、或いは「台嶽図経　大一　元禄八刊（京　栗山氏）」「唐宋画譜（十八羅漢図　蘇軾頌　王世貞賛　大一　幕末刊　套印）」が見えない。『芥子園画伝』は河南版の套印本や五車楼版はあるが、刊年記述が明示されぬままで、『十竹斎書画譜』は明治十一年刊大坂前川版だけしか記載されないが、他に、（一）に天保十二年跋刊　半十六帖　江戸三田屋喜八版、（二）に文政十年小田海仙跋「十竹斎画譜」半二帖（果譜のみ）、（三）に「十竹斎墨華冊」（外題）のみ半二帖、（四）に「十竹斎画譜抄本」（外題）二帖　明治十四刊（名古屋　片野東四郎）、（五）に「十竹斎書画譜」（外題）半八帖　明治十五刊（大坂　赤志忠雅堂）」と、五種の異版が何れも套印で存在し、江戸期蔵版目録の中には他にも文化十一年や文化十四年にも刊行の予告もある。即ち全部では七種もの和刻がある。従来、江戸期画壇では「芥子園画伝」の受容のみが取り沙汰されていたようだが、実際には、この「十竹斎」の方がより広範に受け容れられていたのではなかったろうか。

何れにせよ長沢博士の「和刻本漢籍分類目録」の追補は、後進の我々の負うべき大きな責務であることは間違いないように思う。

中国における日本漢学の研究　その一　叢書

COE海外拠点リーダー　王 宝平（浙江工商大学日本文化研究所）

研究レポート

二松学舎大学21世紀COEプログラムは「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」を掲げているので、世界の主要な地区における日本漢文学研究の現状を把握するのが不可欠の仕事であろう。そこで、かつて本事業推進担当者として本プログラムにかかわった者として、中国大陸の日本漢学研究の現状を紙幅の許すかぎり紹介したい。なお、今の中国で使用する「漢学」とは、広義の「中国学」（Chinese studies）を指す場合が多いため、拙稿ではそれに従う。

現代の中国でいち早く海外の中国研究に目を向けたのは、中国社会科学院である。『外国研究中国』（第1輯～4輯、同情報中心編、中国社会科学出版社、1978～1980）、『国外中国近代史研究』（第1輯～27輯、同近代史研究所編、同、1978～1995）がその代表的成果として挙げられよう。そのうち特筆に値するのは、『国外研究中国叢書』（孫越生・陳書梅主編、中国社会科学出版社、計3点）に入った『日本的中国学家』（厳紹璗、同、1980）である。1100人に上る日本人中国研究者を網羅した辞書である。以上の成果は、「文化大革命」の束縛から解放されたばかりの人々に新鮮な感覚を与えた。

その後、20世紀80年代後半から鄧小平の推し進めた対外開放の政策のもとで、海外への関心がますます高まり、『国外中国学研究訳叢』（李範文主編、青海人民出版社、第1集1986、第2集1988）、『日本学者中国文学研究訳叢』（第1輯～5輯、劉柏青他、吉林教育出版社、1986～1990）等が生まれた。中では影響力の強い叢書としては『海外中国研究叢書』（劉東主編、江蘇人民出版社）がある。但し、日本人のものとしては『宋代江南経済史研究』（斯波義信、方健・何忠礼訳、2001）が唯一の存在である。一方、『海外漢学叢書』（王元化主編、上海古籍出版社、1989～1998）には、『通向禅学之路』（鈴木大拙、葛兆光訳、1989）、『道教』（3巻、福井康順、朱越利他訳、1990～1992）、『中国小説世界』（内田道夫、李慶訳、1992）、『中国的宗族与戯曲』（田仲一成、銭杭・任余白訳、1992）、『中国文章論』（佐藤一郎、趙善嘉訳、1996）、『李白詩歌抒情芸術研究』（松浦友久、劉維治訳、1996）、『中国近代白話小説研究』（小野四平、施小煒他訳、1997）、『柳永論稿―詞的源流与創新』（宇野直人、張海鴎・羊昭紅訳、1998）、と日本人の著書が8点収められており、のべ17点の著書のうち、半分近くを占めている。

日本人の漢学レベルを存分にアピールしたのは『日本学者研究中国史論著選訳』（劉俊文主編、中華書局、1992～1993）で、第一巻通論・第二巻専論・第三巻上古秦漢・第四巻六朝隋唐・第五巻五代宋元・第六巻明清・第七巻思想宗教・第八巻法律制度・第九巻民族交通・第十巻科学技術で、大変な好評を呼んだ。この成功を受けて、劉俊文氏はさらに『日本中青年学者論中国史』（3巻、上海古籍出版社、1995）を、上古秦漢巻・六朝隋唐巻・宋元明清巻に分けて編集出版した。

今世紀にはいつては、まず、鄭州にある大象出版社では2000年から『西方早期漢学経典訳叢』、『当代海外漢学名著訳叢』、『海外漢学研究叢書』というシリーズを含めた『国際漢学研究書系』と銘打った叢書を企画し、9点刊行している。そのうち、日本儒学を論考した『神体儒用的辨析―儒学在日本歴史上的文化命運』（王健著、2002）は、『海外漢学研究叢書』の中に入っている。
一方、中華書局では2001年から『世界漢学論叢』を企画して、日本・アメリカ・カナダ・フランス・ドイツ・ロシアの学者の中国研究著書を16点刊行して、世間の耳目を集めた。そのうち、日本人の著書は、『李白的客寓意識及其詩思』（松浦友久、劉維治他訳、2001）、『西遊記的秘密』（中野美代子、王秀文他訳、2002）、『中国中世社会与共同体』（谷川道雄、馬彪訳、2002）、『禹城出土墨宝書法源流考』（中村不折、李徳範訳、2003）、『清水茂漢学論集』（清水茂、蔡毅訳、2003）、『中国古代帝国的形成与結構―二十等爵制研究』（西嶋定生、武尚清訳、中華書局、2004）。である。

上記の漢学研究書のほかに、海外の漢籍も学界の関心事である。浙江大学日本文化研究所では早くから中日間の書物交流に着眼し、『中国典籍在日本的流伝与影響』（陸堅他編、1990）、『中日漢籍交流史論』（王勇編、1992）、『中国館蔵和刻本漢籍書目』（王宝平編、1995）、『日本蔵宋人文集善本鈎沈』（厳紹璗、1996）、『中国館蔵日人漢文書目』（王宝平編、1997）、『江戸時代中国典籍流播日本之研究』（大庭脩著、戚印平ほか訳、1998）、『日本見蔵中国叢書初編』（李鋭清編、1999）を世に出した（以上は王勇主編『日本文化研究叢書』、杭州大学出版社、所収）。また、上海古籍出版社では、『海外珍藏善本叢書』として、『海外孤本晩明戯劇選集三種』（〈ロシア〉李福清、李平編、1993）、『日蔵宋本荘子音義』（〈唐〉陸徳明撰、黄華珍編、1996）、『日蔵古抄李嶠詠物詩注』（〈唐〉李嶠撰、張庭芳注、胡志昂編、1998）、『唐鈔文選集注彙存』（佚名、2000）と日本を含めた海外所蔵の漢籍の復刻を行っている。

以上、叢書所収の日本漢学著書を略記した。次回からは単行本等を中心に紹介したい。

寄贈資料一覧

（平成17年8月～平成17年12月）

■一般書籍

タイトル	発行所（発行年）
四端与七情　関於道徳情感的比較哲学探討　（東亜文明研究叢書24）	台湾大学出版中心（2005.6）［徐興慶氏　寄贈］
王陽明「万物一体」論　従「身一体」的立場看　（東亜文明研究叢書25）	台湾大学出版中心（2005.5）［徐興慶氏　寄贈］
東亜教育史研究的回顧与展望　（東亜文明研究叢書27）	台湾大学出版中心（2005.6）［徐興慶氏　寄贈］
東亜伝世漢籍文献訳解方法初探　（東亜文明研究叢書29）	台湾大学出版中心（2005.6）［徐興慶氏　寄贈］
中国書院史　（東亜文明研究叢書30）	台湾大学出版中心（2005.6）［徐興慶氏　寄贈］
東亜視域中的近世儒学文献与思想　（東亜文明研究叢書33）	台湾大学出版中心（2005.7）［徐興慶氏　寄贈］
RIVATE ACADEMIES OF CHINESE LEARNING IN JAPAN The Decline and Transformaiton of the Kangaku juku	NIAS Press（2005）［MAGARET MEHL氏　寄贈］
日本の絵本　絵本が表現してできたもの	ベルリン日独センター（2005.2）［桑原節子氏　寄贈］
全訳　漢辞海　第二版	三省堂（2006.1）［佐藤進氏　寄贈］
京都大蔵会展観目録索引（自第一回至第五十回）	仏教大学図書館（1996.3）
翁方綱纂四庫提要稿	上海科学技術文献出版社（2005.10）［呉格氏　寄贈］
漢文教育の諸相　研究と教育の視座から	大修館書店（2005.12）［田部井文雄氏　寄贈］

■目録

タイトル	発行所（発行年）
日本全国書誌　Japanese National Bibliography Weekly List 2005-28№ 2537	国立国会図書館（2005.4）
佐渡家文書目録	高岡市中央図書館（2002.3）

■報告書

タイトル	発行所（発行年）
News Letter　21世紀COEプログラム（人文科学） 「東アジアと日本:交流と変容」ニューズレター　4	九州大学大学院比較社会文化学府（2004.11）
漢字と文化　京都大学21世紀COEプログラム漢字文化の全き継承と発展のために第5号	京都大学人文科学研究所（2005.6）
University of Tokyo Center for Philosophy Bulletin Vancouver Papers and Othei Essays　4	Center for Philosophy, the University of Tokyo（2005）
University of Tokyo Center for Philosophy Bulletin Vancouver Papers and Othei Essays　5	Center for Philosophy, the University of Tokyo（2005）
ERAJRS Newsletter　日本資料専門家欧州協会ニュース　13	Leiden University（2005）
オープン・フォーラム「漢字文化の今　2」報告書　京都大学21世紀COEプログラム 東アジア世界の人文情報学研究教育拠点　漢字文化の全き継承と発展のために	京都大学人文科学研究所（2005.8）
東亜文明研究通訊 NEWSLETTER FOR THE STADY OF EAST ASIAN CIVILIZATIONS　第9期	国立台湾大学東亜文明研究中心（2005.9）
国際日本学研究　法政大学文部科学省21世紀COEプログラム採択日本発信の 国際日本学の構築　国際日本学研究所紀要　第1号	法政大学国際日本学研究所（2005.3）
DALSニューズレター 21世紀COEプログラム 生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築　第11号	東京大学大学院人文社会系研究科（2005.10）
非文字資料研究　No.9	神奈川大学21世紀プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進委員会（2005.9）
図象文献目録　（神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料3）	神奈川大学21世紀プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進委員会（2005.9）
東アジア学術総合研究所 通信　第14号	二松学舎大学 東アジア学術総合研究所（2005.2）
奈良と古代　古代日本形成の特質解明の研究教育拠点　第4号	奈良女子大学21世紀COEプログラムNew Letter編集委員会（2004.9）
国際シンポジウム 古代日本の言語文化	奈良女子大学21世紀COEプログラム 古代日本形成の特質解明の研究教育拠点（2004.9）

寄贈資料一覧

（平成17年8月～平成17年12月）

■報告書

タイトル	発行所（発行年）
法政大学国際日本学研究所国際日本学研究センター　年報2004 文部科学省21世紀COEプログラム採択日本発信の国際日本学の構築	法政大学国際日本学研究所・法政大学国際日本学研究センター（2005.9）
The Newsletter HOSEI I.J.S. 文部科学省12世紀COEプログラム採択日本発信の国際日本学の構築　No.1	法政大学国際日本学研究所・法政大学国際日本学研究センター（2005.9）
21世紀COEプログラム愛知大学国際中国学研究センター　News Letter　7	愛知大学国際中国学研究センター事務室（2005.10）
日中の文化関係を考える　相互認識の「ずれ」を中心に	法政大学国際日本学研究センター（2005.3）
人類文化研究のための非文字資料の体系化　神奈川大学21世紀COEプログラム　No.9	神奈川大学21世紀プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進委員会（2005.9）
非文字資料とはなにか　人類文化の記憶と記録	神奈川大学21世紀プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」（2005.11）
非文字資料とはなにか　人類文化の記憶と記録　追加資料	神奈川大学21世紀プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」（2005.11）
News Letter　早稲田大学21世紀COEプログラム 〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉　第2号	早稲田大学演劇博物館　演劇研究センター（2005.11）
Interface Hymanities 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェースの人文学」ニューズレター	「インターフェースの人文学」研究開発委員会（2005.11）
心の統合的研究センター Newsletter　No.1	慶應義塾大学21世紀COE人文科学研究拠点 心の総合的研究センター（2005.10）
東洋文化　無窮会創設九十周年記念論集　復刊第95号（通刊第329号）	無窮会（2005.10）
奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集　南都炎上とその再建をめぐって　Vol.2	奈良女子大学21世紀COEプログラム 古代日本形成の特質解明の研究教育拠点（2005.11）

■雑誌その他

タイトル	発行所（発行年）
修猷館高等学校二百二十周年記念誌	福岡県立修猷館高等学校 館長 古田智信（2005.5） ［竹下悦子氏　寄贈］
東亞文明研究通訊　第六期	国立台湾大学東亞文明研究中心（2005.7）
域外漢籍研究集刊　第一輯	中華書局（2005.5）　［張伯偉氏　寄贈］
Taiwan Journal of East Asian Studies　Vol.2 No1	台湾大学東亜文明研究中心（2005.6）　［徐興慶氏　寄贈］
台大卓越研究專輯	国立台湾大学（2004.5）　［黄俊傑氏　寄贈］
漢文　讀法　文字　第3回國際學術會議發表論文集	市立大學校（2005.9）　［石塚晴通氏　寄贈］
口訣研究　第15輯	口訣学会（2005.8）　［石塚晴通氏　寄贈］
謡曲に見る娘の姿　立教大学日本学研究所年報　4号	立教大学日本学研究所（2005.5） ［サオワラック・スリヤウオンパイサーン氏　寄贈］
CD−ROM1	［石塚晴通氏　寄贈］
CD−ROM2　漢字DBデモ用	［石塚晴通氏　寄贈］
CD−ROM3　敦煌瑜伽論	［石塚晴通氏　寄贈］
Japanbezogene Bibliotheken im deutschsprachigen Raum	Arbetiskreis Japan-Bibliotheken（2002.6）
jbzb echo　71号　（ベルリン日独センター広報紙）	ベルリン日独センター（2005.6）
jbzb echo　72号　（ベルリン日独センター広報紙）	ベルリン日独センター（2005.9）
中国古籍文化研究　第三号	早稲田大学　中国古籍文化研究所（2005.3）［高橋智氏　寄贈］
古典籍展観大入札会目録	東京古典会（2005.11）
寄贈CD−ROM 二十一世紀　生命的覚醒与超越　在法鼓山僧伽大学問津一法鼓山僧伽大学簡介	法鼓山僧伽大学（2005.1）

※ご寄贈いただき感謝申し上げます。

活動・会議一覧

（平成17年8月～平成17年12月）

●シンポジウム等開催

■シンポジウム等

開　催　日	期　　日	会　　場
国際シンポジウム『世界における日本漢文学研究の現状と課題』	17.09.03～17.09.04	本学・中洲記念講堂
COE海外拠点リーダー会議	17.09.05	本学・11階会議室
シンポジウム『漢文学の近代的転回』	17.09.10	本学・608室
シンポジウム『論語』（本学主催）	17.11.26	本学・中洲記念講堂

■テーブルスピーチ

開　催　日	主　催　等	講　師	所　属	演　　題
17.10.12	漢文教育班	戸川 芳郎	COE顧問	漢文教科書のもつ意味　～日本語文とのからみあい～
17.11.24	COE	中井 義幸	帝京大学 教授	フェノロサとパウンド:余聞
17.12.21	COE	上地 宏一	研究協力者	日本漢文学書誌データベースの概要

■平成17年度（前期）公開講座

（23頁掲載）

●現地調査

■国内調査等

氏　名	期　間	行き先	主な調査機関
會谷 佳光	17.08.04	名古屋市	蓬左文庫
白藤 禮幸	17.08.11～17.08.12	新潟市他	新潟市立図書館ほか
佐藤 一樹	17.09.14～17.09.15	松本市他	松本市立図書館ほか
山辺　進	17.09.15～17.09.16	富山市	富山県立図書館
會谷 佳光	17.10.04	京都市	法然寺
山辺　進	17.10.22～17.10.23	長野市	長野県立図書館
町 泉寿郎	17.10.29	岡山市	三浦叶氏宅
町 泉寿郎 清水 信子	17.10.31～17.11.02	金沢市	金沢市立玉川図書館ほか
磯　水絵	17.11.06～17.11.07	天理市	天理図書館
吉原 浩人 河野 貴美子	17.12.16～17.12.18	高野町他	高野山大学・薬師寺・興福寺

■海外調査等

氏　名	期　間	行き先	主な調査機関
小川 晴久	17.11.02～17.11.07	韓国	ソウル大学ほか

活動・会議一覧

（平成17年8月～平成17年12月）

●国際会議出席等

氏　名	期　間	行き先	会　議　名　称	会　場
高山 節也 町 泉寿郎	17.09.19～17.09.28	スウェーデン	EAJRS（欧州日本文献専門家協会）年次総会	ルンド大学
町 泉寿郎 戸川 芳郎	17.11.15～17.11.19	中国	第2回北京論壇国際学術討論会	北京大学
上地 宏一	17.12.07～17.12.12	中国	'05文学と情報技術に関する国際会議	北京大学

●諸会議

■推進委員会

第14回	17.09.21
第15回	17.10.26
第16回	17.11.16

■事業推進担当者会議

第12回	17.09.29
第13回	17.10.27
第14回	17.11.24
第15回	17.12.21

■実施委員会

第34回	17.09.09
第35回	17.10.05
第36回	17.11.10
第37回	17.11.17
第38回	17.12.01
第39回	17.12.08
第40回	17.12.15
第41回	17.12.26

■編集委員会

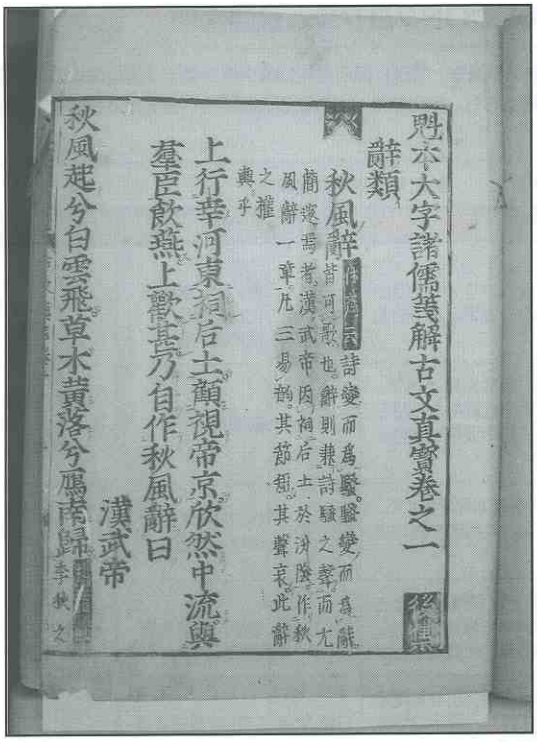
第6回	17.09.16
第7回	17.10.06
第8回	17.11.09
第9回	17.12.14
第10回	17.12.22

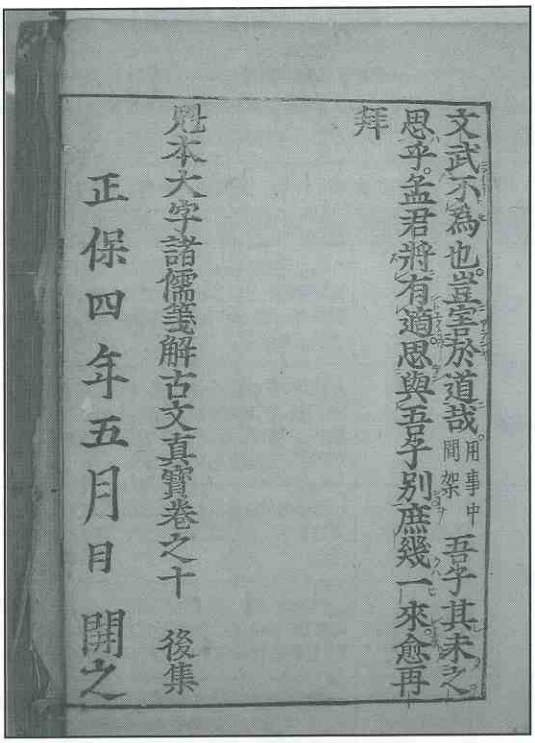
平成17年度（前期）　二松学舎大学COEプログラム公開講座

17年度本プログラムが開催する特別講義等は、日本漢文学研究又は漢文文献の調査・整理に関心を持つ若手研究者及び書誌調査の専門技能者を育成するために開くものです。対象は学内外の大学院生及び院生レベルの若者を主とし、他にひろく一般社会人等にも、講義あるいは講習等を通じて必要な基礎知識と技能を身につけることを目的としています。

◆受 講 料 ：無 料　　◆対 象 者：学生、研究者、教員、図書館員及び一般の方　　◆会 場：本学九段校舎

番号	講座名		内容	講師	所属	時限等	受講者
1	漢字の文化史		私たちの祖先は、中国産の〈漢字〉を日本語化（音読・訓読）し、〈漢文訓読法〉という独自の読み方を創案した。 この講義では三種類の字書（形・音・義）を通して漢字の諸相を浮き彫りにし、漢字の日本語化の実相を探る。	大島 正二	本学 東アジア学術総合研究所 客員研究員	木曜 4時限 4/14～7/28 計15回	32
2	江戸の漢詩		江戸時代は、日本における漢詩の“空前絶後”の繁栄期である。260年の江戸時代を、四期に分け、それぞれの時期の代表的な作品を解説し・鑑賞しながら、その発展の様相を見、併せて日本漢詩の独自性が那辺に在るかを考えたい。	石川 忠久	前学長	木曜 6時限 4/14～7/28 計15回	44
3	演習講座	漢籍書誌学	漢籍の目録作成と解題執筆を通じて、漢籍書誌学の基本を学習する。実物を手に取り、版面の比較、調査カードの記入など、実践的な演習を行う。	高山 節也	拠点リーダー 本学　教授	水曜 2時限 5/11 ～7/6 計9回	8
4		古文書解読	和刻本漢籍・準漢籍に付された日本人の序跋を主な資料とし、ときに書簡・書幅などの肉筆資料をまじえつつ、資料の輪読・解説をとおして、江戸時代の漢文学研究に必要な基礎知識と解読能力を養成する。	町 泉寿郎	本学　専任講師	木曜 6時限 5/12～7/7 計9回	20
5	集中講座	漢字表記論	漢字の書体・字体・字形を定義し、その定義によって明確になる漢字表記の古来からの問題点を解明する（「氏」と「弖」等）。 漢字の字体には、各時代・各地域の標準が存在したことを証明する。	石塚 晴通	COE客員研究員	7/25～29 2・3・4 時限	18
6		江戸の版本	江戸時代文化の基盤として出版文化を考えることの重要性は言うまでもない。その領域や数量という点では恐らく当時世界有数の出版王国であったとも言っても過言ではない。そのような版本の物としての特徴を掴むことに重点を置いた講義を心がけたい。講義は拙著「江戸の版本」の内容に沿って進めることになる。受講前に一読されることを希望する。	中野 三敏	COE客員研究員 （就任予定）	9/26～30 2・3・4 時限	21
7	文献資料書誌技能者養成	和刻本漢籍について ～書誌調査と書誌作成の視点から～	和刻本漢籍は、大学図書館を始め多くの機関で所蔵されているが、それを整理し書誌をできるだけ厳密に作成するに当たっては、いささかの知識が必要になろう。今回は実物を精査しながら書誌作成に必要となるであろう事項を、見落とすことなく記録する上での留意点を、書誌を作成する過程でおこる問題点を、実物や図録などの実例をあげて話そうと予定している。	高橋 良政	日本大学　教授	土曜 2時限 ①5/ 7 ②5/14 ③5/21	23
8		近世書籍文化の変遷と書誌	さまざまな時代やジャンルの書籍・摺物に触れながら、近世書籍文化の変遷をたどる。また、目的・ジャンルに応じた調査方法と書誌記述についても講ずる予定である。	鈴木 俊幸	中央大学　教授	土曜 2時限 ④5/28 ⑤6/ 4 ⑥6/11	20
9		「和刻本漢籍・準漢籍」の書誌と情報	日本に残存・伝流される前近代古典籍のほとんどは、漢籍（仏典を含む）であるという。その中で、最も多くの典籍が残存しながら、その記録・位置づけが困難かつ不十分なために、書誌記録法や分類・目録ノウハウに定位を見ないのが和刻本・準漢籍の世界である。情報化時代の中、電子化目録も念頭に置いた記録と研究が求められる中、これらの書群における書誌の世界はどのように考えられ、扱われるべきか。記録・分類・情報化の観点から考えたい。	相田 満	国文学研究資料館 助手	土曜 2時限 ⑦6/18 ⑧6/25 ⑨7/ 2	21


魁本大字諸儒箋解古文真寶卷之一　後集
辭類
秋風辭
上行華河東汾后土顧視帝京欣然中流與
羣臣飲燕上歡甚乃自作秋風辭曰
漢武帝
秋風起兮白雲飛草木黃落兮鴈南歸


文武不為也豈室於道哉用事中間架吾子其未之思乎孟君將有適思與吾子別庶幾一來愈再拜
魁本大字諸儒箋解古文真寶卷之十　後集
正保四年五月日　開之

魁本大字諸儒箋解古文真寶後集

正保4年刊本

編集後記

雙松通訊（そうしょうつうじん）4号をお届けします。私ども二松学舎大学21世紀COEプログラムも、早いものですでに二年目も半ばを過ぎ、中間評価へ向けて書類作成と報告すべき成果のとりまとめに入りました。中間評価の厳しさも漏れ聞くところ、それに耐えうる実績をとりまとめるべく努力しております。

今回の『雙松通訊』は、そうした報告書に先んじて17年度の活動報告をまとめたものであります。さらに客員研究員によるレポートに加えて王宝平先生の「中国における日本漢学の研究」シリーズや、データベースの構築状況なども掲載いたしました。

ご意見ご感想などお寄せいただけますと幸いです。（T）

牙門将印章
『趙氏墓古印存』より

雙松通訊 No.4

発行日
平成17年12月31日

編集・発行
二松学舎大学 21世紀COEプログラム 実施委員会

〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16
TEL：03-3261-3535　FAX：03-3261-3536

e-mail：coejimu@nishogakusha-u.ac.jp
URL：http://www.nishogakusha-coe.net/